

7912



興國

の宗教

完

大僧正本多日生師序  
文學博士三上參次先生序  
僧正野口日主師題字  
故僧正清瀨貞雄師著

統一團發行

明治  
42 1 20  
内交

永遠



戊申秋日

日主題



## 序

我日東帝國が大陸的國家として坤輿の間に建立せられたるは、今更喋々するを俟たず。我國民近時之を口にするに至りたるは、我帝國の天職を自覺し、その本來の面目に着眼したるに外ならず。近來東京大學に於ける神史の研究に關し之を唱道するものあり。又日露交戦の時局に就て、その曙光を認識せるものあり。又列國が戦局の勝利を稱讚するが爲めに、その見地を高むるもの尠からず。されど何ぞ知らむ、夙に我日東帝國が大陸的大帝國たることの自覺反省を促したるの傑士あり。實に我帝國は、六百五十年前清澄山頭旭ヶ森に於て、日輪東天に昇るの時、至誠嚴肅なる態度を以て、世界統一的の道法を慶讚

し、同時に世界統一的國家を謳歌したる偉人を有せり。我帝國は此時に於て、その天職を道破せられ、その眞面目を光顯せられたるなり。我帝國民の自覺を促し、その抱負、その理想、その信念、その設備を誨へられたるなり。然るに時の爲政者、時の教法家、俱に之を覺らず、瑣國的政略を是とせる愚なる政治家は、この偉人を目して、國家を咒且する奸人となし、厭世的教義を奉ずる幼けなき教法家は、この傑士を指して、道法を攪亂する悪沙門となし、以て極力之を排斥し防遏するに努めたり。爾來六百數十年の長き星霜を閱みしたるも、この間に出でたる爲政家、教法家は、殆ど島國的小見地に陥り、曾て彼れ偉人の聖誨に歸信するの光榮を有せず。獨り豊太閤あり、稍々大陸的理想を

抱懷したるも、事中道にして阻廢し、その理想果して彼れ清澄山頭の偉人に比すべきものありや否やを確むるに由なし。縱し豊太閤をして大陸的理想を有せりしとなすも、そは武力的、外形的觀念に止まり、未だ精神的、教化的の大觀念に於ては、吾人疑なき能はず。我帝國の眞平たる天職を會得し、我帝國の眞面目を實現するに努力したるものとして、之を認むる能はず。之を要するに、清澄山頭の偉人に由て、我帝國はその天職と眞面目とを開顯せられたるなり。而して幸に日露戰役に際會して、この開顯の大教訓を會得するの機會を得たるに外ならず。予は爰に我日東帝國の爲め、我聖祖宿願の爲め、この好運佳會の來れるを祝し、併せて吾教友清瀨華城君の好著「興國の宗教」

を我同胞に推薦するを得たるを歡ぶ。

明治三十八年六月十日、戰時布教の途上、瀛車藝州海田市を  
過ぎるの時、之を車中に認む。

大僧 正日生

列國對峙の世表には互に外交の辭令を巧みにすといへども、  
裏には各々虎視眈々、唯隙に是れ乘ぜんとす。西人の所謂實力  
の存する所遂に正理の在る所たり。の語は、まことに世界の實  
際に適するを覺ゆ。各國是に於て、争ひて、陸に貔貅の精を練り、  
海に鱗鱗の數を加ふ。然れども、國家の進運は、武辨の力のみ  
に頼るべきに非ず。政治に、經濟に、學問に、宗教に、殖産に、工業に、其  
の他凡百の施設、皆齊整並行するにあらずば、到底其完全を望  
むべからざるや勿論なりとす。

我が國は、日清日露の兩大戰を経て、勢威隆々、列強皆我が其の  
伍伴たるを認む。然るに上下輕浮、是れ事とし、華麗是れ競ひ、殊  
に文學界の如きに至りては、不健全なる主義を標榜して、甚し

く世を毒するものあり。人々退ひて、深く新興國民たるの自覺に待つ所なくば、外列國に對する能はず、内國運を進むるを得ず。戰勝の榮譽も、偶々以て國家に殃するなきを保せず。是れ、畏くも近く戊申の詔書を下し賜ひし所以にあらずや。宗教界に於ても亦然り。抑々宗教は人の精神を支配す。國民の文野を判じ、品性の高下を卜すべき一の秤量たり。然るに、信仰界の現狀は如何。其孰れの方面を顧みるも、十分に信徒を安慰し識者を首肯せしむるに足らず。國家の進運に伴ふべき資格を具備するもの一もあるなし。嗚呼新興國民の信仰界たるもの、何時までか此の如くにして、一種の統一なく、一種の活動なくして已むべけんや。郷友清瀨日憲僧正夙にこゝに見る所あり、三十九

年の夏上京の時にも、余を訪ひて、慷慨談論時を移し、余をして、日蓮上人四箇格言の當時も、蓋し此くの如きかと思はしめしとあり。後病軀を力めて筆を呵し「興國の宗教」一卷を著はし、以て新興國民の選擇すべき宗教を道破せり。書成りて未だ上梓するに及ばず、不幸にして終に起たず。悲むべき哉。頃者、僧正の道友山根日東師、其の遺志を繼ぎて之を出版せんとし、序を余に需む。日東師は現に淺草慶印寺に住職たり。寺は嘗て僧正の在りし所にして、余も僧正をこゝに訪ひ、熱烈なる信仰論を聽きしことあり。されば余未だ悉く其書を読まずといへども、僧正の所論は略之を知れり。又未だ悉く其所論に服する能はずといへども、郷友の誼、住持の縁、共に辭すべからざるものあり。

乃ち所感を記して日東師に贈ること爾り。

明治四十一年十二月

三 上 参 次





義、斯の道には、天も與みし、地も與みし、<sup>地も與みし</sup> 聖も與みし、賢も與みし、  
 國も與みし、人も與みし、<sup>聖も與みし</sup> 正業の存する  
 ところ、天祐あり、光明あり、<sup>聖も與みし</sup> 加して慈悲は汝の傍に  
 あり、是れ世界を五貝の根拠ある最上の神祕なり、豈  
 唯平素理に固着して國家と國家との生存問題を忘れ去  
 るの愚を咎むべけんや。

吾人は吾人を愛する為めに、<sup>地も與みし</sup> 猶我國家を愛せよべか  
 らず、世界の平和を維持せん為めに、<sup>地も與みし</sup> 猶我國家を愛  
 せよべからず、國家は吾人に國民として愛を送くるの  
 みならず、世界にも愛を送くるものなり、個人にも亦  
 生存を與ふるものなり、故に曰く、<sup>地も與みし</sup> 國家の生存は吾人  
 の生存を意味し、國家の確立は世界平和の確保を意味

余は、  
戦勝の一國民たることを得たり、  
然して余は平素宗教に喜び、宗教に憂  
ふる者也、茲に小冊子を著はし、  
度んで  
戦勝興國の日本に献ぐ。

著

者

## 緒言

本書題して『與國の宗教』と云ふ、戦勝の月桂冠を戴ける我國の地位として、宗教問題の輕々に看過すべからざることを叫ばんが爲め也。

然れども宗教問題の國家に重大なる關係あるは、戦勝と否とを問はざる筈なり、而して多くの事實は常に之を不問に附せらるゝにあらざや。

今や有史以來の大快事に値遇し得たり、奮勃たる國民の元氣は、各種の方面に發するものあるべき也。所謂る人心の惰力より一轉機を促すの時たる也。余不敏、斯の大問題に任ゆる能はず、然れども唯能く國の愛すべきを知れり、唯能く宗教の輕視すべからざることを知る而已。

是を以て之を天下に叫び、之を主張して、聊か我が所信を表白する者也。

希くは大方の教に吝惜なからんことを。

明治三十八年三月

著者 題

### 興國の宗教目次

#### 第一 序論 大なる日本帝國

##### 一、興國の日本

◎露歴一變◎大帝國の現出◎世界の大地圖◎興國の意氣◎山嶽河海の廣大◎大日本の叫び◎古き天地に於て◎大日本の意義◎冠章燦然◎晴始の姿◎何ものかの形◎世界の東隅◎爾南陽翼の志◎潮流天風の便◎征露の賜◎名譽の月桂冠◎列國環視の中心◎置き責任◎自愛奮興

##### 二、新興國たる國民の自覺

◎一呼百諾◎帝國の特産◎執權時宗◎忠勇義烈◎國體の精華◎明治の聖代◎國運進歩◎日露隙を開く◎價高き風骨◎今の露將◎一般勇氣に富む◎日本魂◎亞細比亞人の古跡◎勇氣と力量◎同盟の英魂◎爾を以て國是とし◎イーストインディヤ・コンチネンツ◎海軍思想◎南極地帯◎海上王◎愛國にも富めり◎兵氏の總理大臣◎自由保守黨政略◎議論は無用◎談列又談列◎最後の手段◎精進一致◎唯英獨あるのみ◎舉國一致◎大國民的資格◎風俗宗教の善美◎教育機關の完成◎智識の圓成◎國民◎統一の觀念

目次

## 第二、本論 興國の宗教問題

### 一、日本現時の宗教

◎大舞臺◎新脚色◎戰勝冠◎新格舞臺◎國運の進歩◎混濁にして暗澹◎左顧右顧◎救護松◎感情の  
に走り◎薩漢の狂態◎日本主義◎科學哲學の名の下

### 二、日本人の宗教的觀念

◎誰か道ふ◎謂ふことを止めよ◎自然宗教の一形成◎宗教思想◎血を見るの衝突◎組織的宗教體◎脚  
肝其儘◎祖傳問答◎箇中の消息◎加茂武淵◎不統一ながらも◎信念界の豊穡

### 三、日本の宗教的雜多の信仰

◎イカナム山◎扶桑教◎御嶽山◎山嶽崇拜◎海に髪を獻じ◎我國の舟夫◎神武の息兄◎海神を宥め◎  
那古浦◎土人の頭腦◎自然物の個物其儘◎蝦夷人の體◎北米のジュリキイト◎動物崇拜◎白鷺人  
の煙草◎古樹に注連◎迷信の巷◎一發萬集◎堀の鼻に寄附く◎聖人怖れ

### 一、日本の首府としての東京

◎花のお江戸時代◎五歩に一樓◎大雲◎文明の魁◎活天地◎長榮利荷◎江戸土產協會◎變遷推移◎願

色なく◎文明の利器◎迷信の穴◎高輪の石神◎鼠小僧◎一幅の全宗教術◎天然物崇拜

### 二、宗教的都市としての京都

◎鐘々たる御殿◎三十六條◎軸より出づる◎東の大谷◎宗教的都市◎大阪の商業的◎今の瀟灑◎鹿  
三個の石壁◎倉稻魂命◎狐と言へば稻荷◎狐の根據地◎幽暗駭客◎桑者穴めれば繁し◎和漢三才圖會  
◎生殖器崇拜◎三年阪の迷信◎京麩の地

### 二、日本信仰歴史の縮寫

#### 一、上世

◎過去二千有餘◎卜占禁厭◎中心もなく◎陰陽道◎妖殺の害◎勅を天下に下し玉ふ◎一齊に淫殺◎道  
教に擬じ◎九星を脱ぎ◎巳年は地獄◎腹帯には戌の日◎奈良平安の朝◎轉生輪廻◎死して天狗◎經卷  
を唱む◎天變も地天も◎太宰春臺◎穢弱迷信

#### 二、中世

◎鎌倉武士◎忍に斃れ◎頼に矢は立つとも◎服深男運◎平家物語◎其名こそ其義◎新勃興◎禪宗の見性  
的◎法華の明顯的◎武士道の發達◎時代の花◎平氏の驕奢に因りし如く◎若狹舞臺◎治亂相尋◎修  
羅の巷◎櫻橋兩樹の下◎賄宗の命脈◎宗教家の腐落◎利民を圖る◎感化の動力◎耶穌教◎織田信長◎  
安土大成寺◎利害の弊◎奇術的◎國體を蔑し◎豐臣秀吉◎國祭令

### 三、近世

◎近世徳川氏◎耶穌教◎常樂院日經◎不受不施◎時弊の一針砭◎儒學にも亦◎福朱の學◎藤原授爲◎知行合一◎中江藤樹◎陽明主義◎木下順庵◎博識居中◎南村梅軒◎宋儒を排し◎一世を睥睨し◎天下を統轄す◎井上金鐘◎學派と學派◎主義と主義◎禁制又禁制◎犧牲遠避せず◎異學禁制令◎我國の教神◎兩部習合◎唯一神道◎反對の主張◎神道學說◎吉川惟足◎儒教と調和◎山崎暗斎◎菅原謙徳◎墨加派◎墨住教◎無學無識の徒◎三世相大難書◎吉凶の判斷◎照仁の亂後◎諸國交通の道◎千社詣◎四國遍歴◎不生産的◎奸偽◎天狗◎一國の政府◎面白き滑稽事◎他は以て知るべき而已

### 四、明治維新

◎天下の形勢◎道心微薄◎藤井文次郎◎天理教◎大和◎蓮門教◎心學派◎創立組織◎普通以下の人々◎籠り◎淫心誘起◎靡深の眼◎憲法の保障◎濫發横出◎科學的研究◎新信仰◎自家自流の滲透◎信仰の源泉◎健全なる信仰◎混濁不調◎濁流の信仰◎個人の信仰◎家庭の信仰◎一異彩◎亂綱◎幼稚

### 五、迷信奇行の國家の體面に及ぼす弊害

◎文明國◎太古原始の信仰◎教理論◎風俗◎不潔無恥◎道義◎國家の資格◎政治問題◎この國◎國教◎料理◎新事業◎學者教育家◎生煎壽具拜◎博遊笑覽◎グリーフィ氏

### 六、宗教の資格

#### 一、合理的の宗教なること

◎結晶體◎寄生虫◎立脚◎道理あるもの◎善を白し◎合理的認識◎智目行足◎實踐派◎大體立◎信仰の對象◎宗教は宗教なり◎新古に超越せる◎信智の二徳◎餘りに危險

#### 二、活動的の宗教なること

◎宗教を待つ所以◎阿棟若主義◎釋迦人天師◎世の憤懣◎灰身にあらず◎勇猛彼れが如く◎仙居◎學教◎毎に自らはの念を作す◎破天荒◎活動主義◎現實界◎卷舒

#### 三、道徳的の宗教なること

◎世の所謂道徳◎時代と共に變遷◎萬物の頂に居し◎人道とは何ぞや◎人生の生活◎智徳行使の生活◎東西の經濟學者◎汝々たる俗物◎道徳の基礎◎宗教にして宗教◎吾子に言はず◎無道徳◎絕對の道徳◎向上律あるべし◎好闘門なり◎人道の罪人◎宗教中の資格

#### 四、國家的の宗教なること

◎讀者の頭腦◎醒睡し出づる以前◎思想は根本なり◎イデオロギアの、號令◎敵と血◎國家問題◎武藝にちらず◎宗教是れなり◎賢國奴◎社會平等主義◎移住するも可なり◎越國の大體◎吾國住◎差別門◎臣は以て君に忠たるべく◎權兵衛の子◎因縁約束◎禮道用道◎平等慈悲◎善惡の差◎日本に殉すべく◎國家の危殆◎吾人を愛する爲めにも◎國家政◎守護國家

### 五、統一的の宗教なること

◎感化の力◎晦澁の弊◎自由主義◎宗教の神聖を破る◎神秘派◎安心の趣味◎一端を固執し◎統一的の教理◎人生を無視す◎未來の實在さへも◎開眼的◎キリスト◎激烈なる精神◎慈悲の涙◎活ける信仰◎四悉檀◎天晴れぬれば◎對經兩方面の接合◎常識以上◎斷観不離◎兩端の衝突◎死活の大槓◎億兆心を一に◎國家を統一す◎個人の安慰◎向上せざる乎◎人生觀

### 七、本尊と信仰

#### 一、宗教に於ける本尊の位地

◎最向上境◎活ける交通◎大自觀◎本尊の性質◎宗教の分類法◎本尊を基礎として◎包含的◎宗教研究◎地位實に重大◎風雨雷電◎正しき條程◎轉説する傾向◎ハルトマン◎根柢とは◎乾燥無味◎活ける生命◎本尊本體◎一大失態◎戒定慧◎苦悶ある人間◎空は愈空に陥り◎感現を殺さしめん◎高きより高きに◎自己の見性◎主眸の一面◎佛教修行の方法◎第二位◎觀智の助縁◎信念行◎最要の因◎吾人の異しむべきは◎顯觀◎曲解◎法器借り◎重要な地位

#### 二、宗教に於ける信仰の位地

◎吾人の健論◎法あるも道あるも◎自由主義◎斷い頭も信心から◎他力主義◎純粹の信仰心◎自力他力の兩方面◎岸下に落ち◎一物もなき乎◎苦行に依り◎人格的の神◎客體の加被力◎自惑自信◎信念

發動◎指導は彼れにあり◎併有して須臾も分立すべからず◎我れの力◎審議せよ◎過不及

### 三、現代に於ける相承論の價值

◎五代を替ゆるも◎十中の八九◎一器の水◎道統の傳◎孔子◎先聖後聖◎ウキツテンメルロ、の守門◎改革運動◎人心に怖畏を興へ◎一生面◎神聖を演ずるもの◎満足なる立證◎時人叫んで曰く◎文學復興◎古の耶穌教◎羅馬法王◎新舊兩教の軋轢◎カルギン派◎プロテスタント、◎歴史は繰返すもの◎佛教の相承論◎相傳不相傳の議論◎當時の思潮◎制宗權◎百方苦心◎精神全く失せ行き◎弊害百出◎骸骨を擁す◎現状の偽作◎古の道◎教祖の人格◎異端を生ぜざらしむ◎滾々として涌き◎いかにも神々しく◎時代は移り變りぬ◎殘片の形式◎價値ある乎無き乎◎思想信仰◎人心より一掃◎合理は何處迄も合理なり◎不信仰の思想◎根本的疑問◎無用なりと絶叫す◎この思想を懐くもの◎正しからざる相傳なれば◎價値の岐るゝところ◎合理的能力◎命數且々に迫り◎智識に乏しく◎道理は天地の公道なり◎理義相承とも◎三文の價値

### 四、統一的の宇宙論

◎大なる問題◎理的に見るもの◎無始無終◎巨細迷悟◎造物主◎終りなき時間◎進退し出沒する◎小を以て見る可らず◎太極の存在◎蟻の富士山◎黙して止むべき乎◎科學となり◎一元論◎種々の稱號◎神と稱するもの◎證明説論の完結◎二にもまれ三にもまれ◎物心兩立◎大の大なるもの◎三世に涉り◎三千事常住◎一大團體◎差別を生じ◎物欲と戦ひ◎聖者も存し◎大天地◎自己の迷見◎死物たらしめ◎從一法生◎略開三顯一◎實相論の根柢を築く◎開道者◎今の大覺者◎共存長◎第一初番絶對◎

不可思議境◎神祕の閉鎖◎具體的宇宙◎真如の理体◎恩寵に光被せられ◎眞面目の態度◎一界の悟◎  
天人論は言へり◎理的中心◎心的の傾向◎靈點點暗◎凡俗の心◎迷悟の撰擇なき單的凡心◎プロヒネル  
やハツケル、の觀る眼界◎蟬遊の一日◎他の一面に◎三千世界◎大自觀と交感し◎無始に存在し◎統  
一的宇宙論

### 五、統一的人格論

◎天神の存在◎多神教◎阿彌陀◎中心なき乎◎脈絡關係の母◎分列又分烈◎本因緣◎一法爾◎宇宙  
論に根底して◎大本主◎宇宙の一部に包まる◎大も小も巨も細も◎未途者は伴隨◎光被力を有す◎遠  
觀の力◎衆多の作用◎大なる根底◎同じく悠久◎佛教の開顯論◎無限に接觸◎一跡不二◎久必ず久な  
らず◎自らの形を以て◎大覺者の言に聽かしめよ◎諸の善男子◎古今を貫き◎千姿萬影◎佛々を攝し  
◎權化の方便◎紊亂滅烈◎電氣力◎佛身論◎佛陀の林用◎開顯論に啓沃せられ◎三世に高く◎異教教  
◎所作の佛事◎不可思議境◎散漫たる多神◎統一中心の大覺者◎三大理由◎歴史上の大因緣◎印度に  
降臨◎教理上に散見し◎大日を主張し◎釋迦み中心として◎諸佛化境◎無限に活動す◎相對的に降り  
◎三千大千世界◎一佛界の中◎各條各行◎釋迦自己の顯本◎無始に常住にして◎化益止むことなく◎  
釋迦牟尼佛に結歸す

## 第三、結論、我國將來の宗教

宗教の資格を問ふこと

宗教の性質を撰ぶこと

本尊と信仰との完備

◎宗教の必要◎飢えたる虜◎合理明◎背理◎活動的◎厭世主義◎近代的◎迷信的◎國家的◎個人  
主義◎差別門に出て◎統一◎諸多の主義◎各々個々◎背反亂離◎確實なる根據◎架空想像◎過々  
として進まざる◎本尊の性質◎宗教として初歩◎信仰問題◎理性的のみに◎自己を本尊として◎自己  
を蔑如し◎熱誠玩味◎顯然◎戰勝國◎經營施設◎重要問題

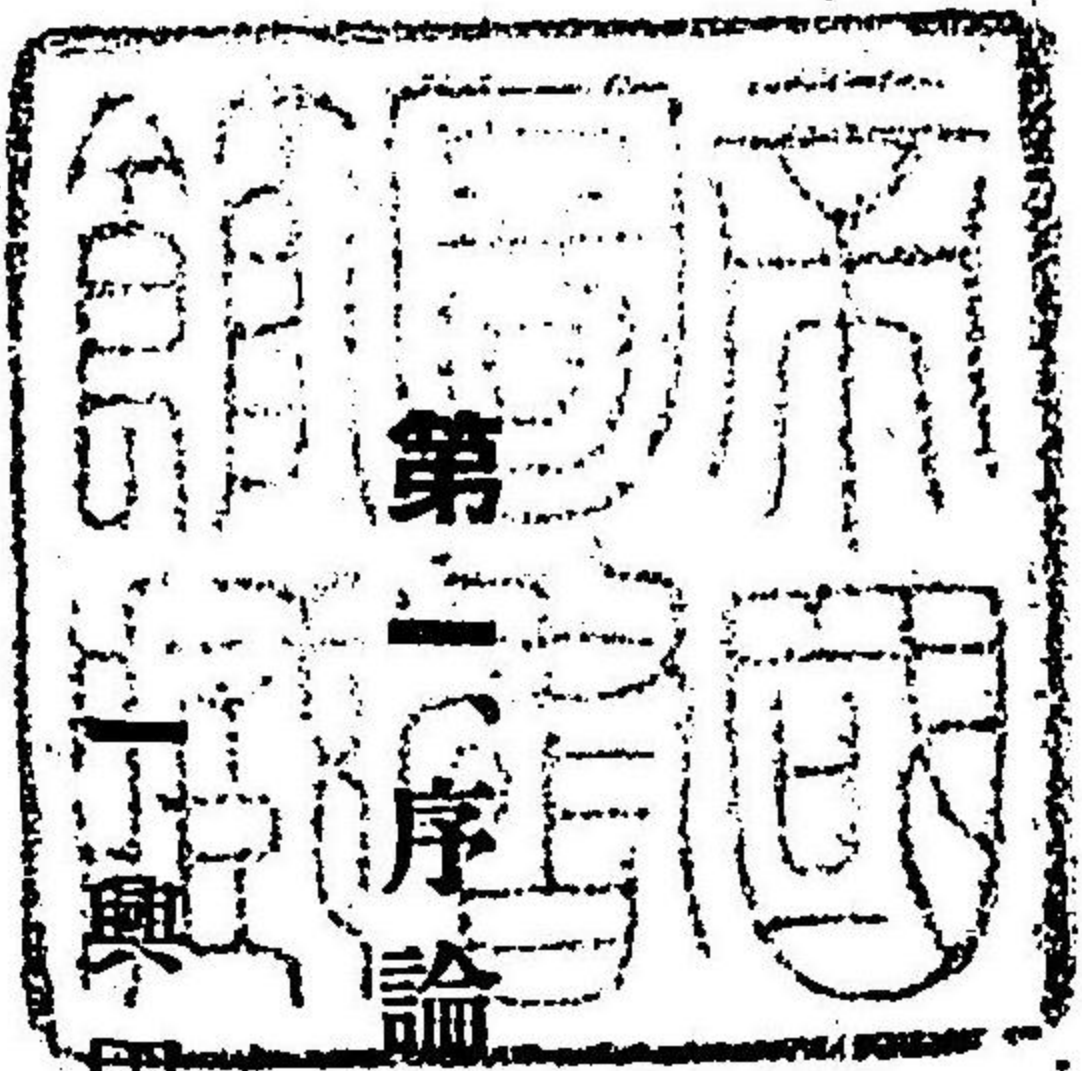
吾人には各自の案内者あり、靜かに耳を傾けなば、  
正しき言葉を聽くならん。(ハイムソン)



# 興國の宗教

清瀬貞雄著

大なる日本帝國



興國の日本

霹靂一聲、天地震撼、人心驚き、世界亦將に目を拭はむとす。國民よ、汝の心を靜にして、天鼓の自然に鳴り響くを聽け、山嶽も、河海も、風雨も、雷霆も皆等しく、亞細亞の東方に、大帝國の現出すべきを報ずるものにあらざるはなし。宗教家よ、汝の思想を濶大にして、靈界の混濁を絶叫しつゝある音響を感知せよ。祝、祠、の唱、讀經の聲、讚美歌

興國の日本

興國の日本

の叫は、未だ以て世界の大地圖を改造せむとする、大なる日本の心  
靈界の要求を充たすに足らざることを覺知せよ。  
見よ、興國の意氣、有爲の氣象は、今や子守、牧童、田夫、野婦の間にまで  
充溢し、辭勃として日本國民の間に磅礫せり。大なる日本の名と實  
とは、世界の大局面に並び現はれて、雄飛豪歩の秋は既に到達し來  
れるものあるを知れ。

大日本の言、其大なる文字は、我邦之を稱ふる久し矣。大なるもの優  
勝を意味すべく、尊貴を意味すべく、必ずしも版圖の大なるに限ら  
ざるべし、然れども今や、尊勝なる我日章旗は、山嶽河海の擴大なる  
意味に於て、大なる文字以上に於て盛運佳會を迎へつゝあるにあ  
らずや。大日本の叫び、愛國心の喚び聲は、獨り源光國の主唱に依り、  
獨り新井白石の口吻に出で、獨り昌平黌の儒者の手に據り、獨り藤  
田東湖の正氣歌に激せられたるもの而已と思ふべからず。或は鎮

護國家の主義に據り、或は興禪護國の理義を張り、或は眞俗二諦の  
旨趣を行ひ、或は立正安國の主張を持せりしものあるを知らずや。  
此等幽渾穆澤の活理義、發し現はれ勃然として千有餘年の國史を  
照らし、古き天地に於て業に已に、國利民福の教鼓を鳴らし、大日本  
て、國礎を根本的に牢固ならしめたるを知らずや。

大日本なる意義は、大なる國民の自覺自信を待つて實現せられ得  
るもの也。然り、國民の自覺に因つて群雄割據の時代より一轉して  
統一の日本となり、維新の宏謀となり、憲章燦然となりぬ、又再轉し  
て、東洋の尾端より世界の舞臺に踊り出てむとし、島國根性を逸脱  
して大陸に展足せむとし、蜻蛉の姿は今や變して更に何ものかの  
形に漸く化せむとす。これ謂ふ迄もなく、大なる日本を地球の表面  
に建設するの活意義たらずむはあらざる也。

日本の天形は、周圍海洋を以て環らし、陸に於ては限られ、海に於て

興國の日本

は遮らる、この理に依り久しく世界の東隅に屈辱して一步も出づる能はざりき。偶これあるも神功の御足は韓國に止り、豊公の銳鋒を以てせるも猶且全明に及び得ずして止みぬ。我邦人昔より、圖南鵬翼の志を海外に揮はむとせしもの亦少しとせず、然れども我歴史上の英雄は區々として領土の築基に忙殺せられ、世界的大なる意味に於て未だ爲すことの逸なかりしを奈何せむ。所以者何、人為的に於ては制度之を防げ、天爲的に於ては地形之を隔て、大陸と島嶼と相隔離して、列國と接近し交通するの便益を有せざるに因れりと謂ふべし。

斯くの如き日本は一轉し再轉して、世潮は益制度を促進せしめ、海潮は愈船航を活躍せしめ、潮流天風の便相依りて生し、今や萬里の海洋も關山一峰を超ゆるの勞あらず、天外の異域も猶比隣の觀を呈するに至りぬ。

國民よ汝の自覺を明かにせよ、彼の征露の役は、天地を震盪せしめたり、嶋嶼の日本が一躍して世界の大戦局に馳驅し得たり、世界間題事實上の解決者たる新進銳意の大日本たることを知り得たるにあらずや。盛んなる哉、この名譽を占め得たる大なる日本帝國、地位を高めたる大日本、膨脹せる大日本、抱負ある大日本、見物の多き大日本、嫉視せらるゝ大日本、歡迎せらるゝ大日本、實に世界環視の中心に立てる我日本帝國の天職の重き所以、而して斯國民が重き責任を荷ふて起つべき自覺奮興を要する所以の大意義に於ては、是れ識者を待たずしても猶燦然たる問題にあらずや。

## 二、新興國たる國民の自覺

我國民の忠勇義烈なる、一呼百諾、上命下應、唯君國の爲めたらは、生命も鴻毛の輕さに比し、自己を犠牲として忠に殉し、義に進む。斯の

新興國民の自覚

氣象、斯の元氣は、我日本帝國の特産なり。これ古より日本武士道の歴史、深く國民の腦漿を感化し、四民の精神を司配したるに歸せず。むはあらず。看よ執權時宗の意氣軒昂なりし、傑僧日蓮の立正安國に活動せりし、禪僧東岩の憤撃なる國禱に於けるが如きもの、皆、六百數十年の古天地、蒙古襲來の當時業に已に、日本國民的忠勇義烈の氣象を代表的に發揮したるものと謂ふべく、近きものに於ては亦、頼襄の日本外史に鬱勃たるが如き、林子平の三國通覽、及び海國兵談に其抱負を開示せしが如き、新井白石の羅馬傳教師シロテ、と問答して氣焰を吐きしが如きは皆是れ、我日本の國體を發揮したるものと謂ふべく、而かも其着眼、彼等に於て少しく異なる所こそあれ、彼等は一齊に日本國民の思想を代表的に實現したるものと謂ふべし。

明治聖代の今日に臻り、國民親しく聖恩に浴し、德澤に沾ふ、依つて

以て日本國民的思想の發展、頓に著明となりしを覺ゆるなり、然り、國運の進歩、人智の發達、著大明晰なり、諸種の事業が如何に發達進歩せしかは、最近の統計之を示して瞭然たるにあらずや。

軍事機關の整頓、教育機關の進歩、國民思想の發達は、遂に下瀬火藥の發明となり、有阪速射砲の發明となり、種子田機械水雷の發明となり、宮原水管、山内速射砲、小田水雷、外波及び木村無線電信、伊集院信管、村田銃、山田輕氣球及び諏訪式鐵舟の發明となりしが如き。或は航運業に於ても、或は鐵道業に於ても、或は貿易事業に於ても將た亦、商工業諸種の會社事業に於ても其發達の著明なる、過去十年間の成績に徴するに殆んど數倍の巨額を増加せしを示しつゝあるにあらずや。これ何れも皆、我國力民富の増大せるを證據立てたるものと謂ふべからずや。宜なる哉、日露隙を開き、干戈相見へし以來、我軍の向ふ所敵なく、戦へば捷ち、攻むれば抜く、山河我れを迎へ、

草木風靡せざるなきに至れり。彼れ露西亞を看よ、彼れは近世クリ  
ミヤ、戦争に於て價高き屈辱を拂ひたり、ニコラス、一世は憤死せり。  
借問す、今の露國たるものクリミヤの屈辱、今の露將中、能くトツド  
レイベン、の夫れの如く、善く策し善く戦ひしものは誰ぞ。  
干戈の戦争に強きものは、平和の戦争にも亦強し、勇氣は特り軍人  
の専有物ならず、日本人は一般に勇氣に富めり、然り、學者も勇氣あ  
り、宗教家も勇氣あり、商工家も勇氣あり、乃至筆を援る人、舌を業と  
する者、及び伎藝を演ずるもの皆、豈日本勇、日本魂なからんや。亞刺  
比亞の古諺に言はずや『學者一滴の墨汁は義人の血と等しく貴し』  
と、何んぞ這箇の意義と其意の相似たる斯くの如くなるや。實に然  
り、文官文士の外患を硬論するあり、國難を絶叫するあり、宗教家の  
人心根本勇に教ゆるあり、教育家の國民思想の基礎を牢固ならし  
むるあり。日本は國としては實に東洋の君子國たり、民としては實

に愛國の民たり、義に富み、勇に進むの國民たる也。然れども今や、我  
邦が戦勝の結果に荷ひ得たる最高の名譽を以て、戦勝の大國民と  
して世界の舞臺に蒞まんとす、能く戦勝の大國民として恥づる  
ところなき程に、欠ぐるところなき程に、其抱負と其力量との兩翼  
を展べて翩翩として大陸の天地に向ひて、能く立波に翱翔し得る  
や否や。  
我同盟の英國は元來我日本と同じく、原と環海の島嶼國たりき。然  
れども雄心勃々、志を四方に馳せ、眼を世界中に放ちぬ。寒國加奈陀  
の如きすら、熱帶印度の如きすら、猶且阿弗利加の如きに至る迄も、  
彼れが經營に係らざるなく、世界到る處彼れが領土の存在せざる  
なきを見ずや。彼れ英國は商を以て國是とせり、彼れは波濤を越へ  
て萬里の異域に赴く、恰も隣家を訪ぬるが如くす、彼れは毎次國旗  
に先つて貿易を世界に試むものならずや。看よ一の例を看よ、往時

新興國民の自覚

文明を以て目せられし印度が英國の手に歸したるの原因は如何、最初イーストインジャ、コンパニーなる一商社の之きて、印度に開業せしに始り、而して軍艦之れに次て往き、兵隊之れに打ち續きたるにあらずや。知らずや、英國の久しく蘊蓄せる海事思想は、今や實現して其進歩整頓實に驚くべきものあるを。彼れは南阿戰爭に於て、七千哩の遠距離に、二十有餘萬の軍隊を送るに當り、優に自國の船舶のみを以て之を辨じ得たるのみならず、既定の定期航路を一日も休止せざりしと云ふにあらずや。斯の一事に就て見るも、實に彼れは海上王の名に恥ぢざるものと云ふべく、實に彼れは世界の制海權に覇たるものと謂ふべし、豈羨望の極みにあらずや。彼れは單り海事思想に長ぜるのみならず、愛國にも富み義勇にも富みたる國民なり。看よ、近き一例を看よ、クラッドストーンは政敵ペーコンスフイーールドと相對峙して其名共に高さもの、具氏の總

理大臣の椅子を占るの時、前者は露國當時の外交行動を以て自警を爲すに足らずとし、後者は以て大に警備の要ありと論ぜり、自由保守兩政黨の首領、持説持論は斯くの如く相執つて譲らざりき。然れども事實は進み來りぬ、議論は無用となりぬ、露國はアフガニスタン、バルシヤに侵入し、更に進んで英領印度に這り込まむとせり。談判又談判、抗議又抗議、然れども露國は毫も省るところなかりき。英政府は最早最後の手段に訴へざるを得ず、軍事費の協賛を議會に求めざるを得ざるに至りき、グラッドストーンの地位と持論とよりしては、如何に困難を感ぜりしやは想像の外に出でたるならむ。然れども議會は滿場一致を以て歡むて軍事費の協賛を與へたりき、國歩の艱難に處しては、彼等の眼中、唯英國あるのみ、唯國利あるのみ。具氏の熱烈なる、巧妙なる演説亦與つて力ありしとは云へ、彼等の愛國心に強き、思はず黨想を消磨せしめぬ、義勇心の厚き、

新興國民の自覚

顧らず派別心を忘却せしめぬ。げに上下戮力、舉國一致、外交の完成に當れるの美事に至りては、常に彼等の特色として異彩を放ち居る所ならずや。

盛んなる武、慶雲爛として、天祐我邦に降り、天皇の稜威と相倚り相結びて、大戦勝の地位を得たり。今や國としては、戦勝國たり、人としては、興國の民たり、豈興國たる國民としての資格を要せざらんや。豈大日本國民としての抱負なかるべけむや。少くとも英國彼れ、如く、船舶航路の發達、商工業の進歩、海事思想の増養、制海權の擴大、殖民思想の喚起、貿易事業の増進、此等各項の大國民的資格を、作爲し、獲得すべきものたるは、論なく、日本國民が今後世界に飛躍し、大陸に馳驅するに於て、缺くべからざる資格とし、又要素として、此等諸項を、敵へ見ず、ひはあらざるなり。然り、斯くの如き各項の要素は、單り海外思想、世界思想の喚起を促すものにして、猶この上に戦勝

國の地位として、又大陸的日本の立場として、世界の文明國として、東洋の君子國として、今後吾人國民たるものは。

- 一、風俗、宗教の善美を圖らざるべからず。
- 一、教育機關の完成を告げざるべからず。
- 一、智徳の圓成を達せざるべからず。
- 一、國民的統一の觀念を牢固ならしめざるべからず。

此等は皆戦勝國民の資格として、必ずしも具備し完成せざるを得ざる、重且大なる要項にあらずして何ぞ。然り然れども、宗教己外の各問題に至りては、之を他日に譲りて今は論ぜず、若し夫れ戦勝國の宗教問題に關しては、特に大に慮る所あり、これより以下各項に於て論陳する所あらむ也。

日本の國號をカムサスカの土地に移し今の日本を古日本と改稱しカムサスカに假館をすえ貴賤の内より太器英才ありて徳と能と兼備の人を擢舉し郡縣に任し開業に丹精をなさしむるに於ては年を経るに追々繁榮を添へ終に世界第一の大良國となるべき事。

(本多利明、寛政年中の著、西域物語。)

### 第二、本論 興國の宗教問題

#### 一、日本現時の宗教界

既然奮乎、東隅より一躍して世界の舞臺に表はれ、列國環視の中心に居して、焉れより將さに演ぜむとする新脚色は如何に晴々敷ことならずや。其見物の多き丈け夫れ丈けに、觀客の熱視する丈け夫れ丈けに、出演者たる我日本が如何に手腕と注意とを要するかは、其舞臺に登らむと欲する以前に於て、業に已に其大覺悟を爲し置くべきことにあらずや。然り日本が戰勝冠の名譽を戴きて演ずる新舞臺は其幕を開かれぬ、豈用意周到にして堅忍不拔ならざるを得んや。

國運の進歩や、民智の發達や、東西の等しく認知するところ、世界の

日本現時の宗教



悉く戦慄するところ也。然れども、看よ省みて我國の宗教界を看よ。嗚呼、宗教界のみ獨り何故に斯くの如く混濁にして暗澹なる、危然雜然として、人の適歸する所に迷はしめ、世の救はるべく亦人の辿るに由なからしむるものは、これ豈我國宗教界の現状ならずとせむや。噫、汝國民よ、汝の信賴すべき心靈界の要求、信念界渴仰の救世船は、今將た何處に其消息を傳へつゝありや。吾人は知り得たり、救世船其ものは今や、風雨暗澹、怒濤澎湃の間に在りて、一浮一沈、左顧右覆、其危險と頼み少きことは例ふるに物なき程にあらずや。濟世利民の救護船其ものは、今や却て、夫れに救はれべき乗客の口に依りて、晉られ、救はれべき人の手に依りて、破壊せられ、救はれべき者の足に依りて、蹴り落され、ひとせるにあらずや。

其属る者或は感情の一に走りて、智意の二を缺くあり、或は智の一、若しくは意思の一に立籠りて、未だ完璧を得ざるあり、其破壊しつ

ある者の多くは、境遇に依りて異なりと雖も、内よりするもの、外よりするもの、家奴の手に依り、盗兒の腕に依り、癡漢の狂態に、愚人の迷妄に、打破られ、取毀たれ、過たれぬ。其蹴り落さむとする者或は、無宗教の名の下に、固陋なる日本主義てふ名の下に、科學哲學の名の下に於て行はれぬ。これ豈、能教と所教との顛倒、下尅上の沒德義、而して亦これ、城者破城の不心得者ならずとせむや。

## 一、日本人の宗教的觀念

誰か道ふ、我日本人種を以て元來宗教の信念に欠乏せる人種なりと。謂ふことを止めよ、日本人豈精神なからむや、日本人豈心靈界の趣味を擲するの頭腦なからむや、日本人豈精神界の安境を得ずして息まひや。

知らずや、儒教來るの以前、佛教未だ東漸せざるの時、早く業に己に

日本人の宗教的觀念

我邦固有の民性より發出したる自然宗教の一形成を造作し居たるものありしことを。後ち漸く阿直岐の使に依りて儒教を得、支那韓國の手に傳へて佛教の東漸し來れるを見る。斯に於て乎儒教思想は我國性と相合して、一種の宗教を作り、佛教思想は我國性と相結びて、一種の宗教を出だしぬ。其間、血を流すの衝突となり、手を握るの調和となり、漸く雜然たる形成の下に、組織的宗教體を構成するに至りぬ。兎もあれ日本人の天性を捉らへて以て、信念界に冷淡なり亦欠乏なりとは漫稱し難き例證は多かりぬ。猶今一つ吾人をして近世封建時代の儒者の腔子に問ふところあらしめよ、彼れ伊藤仁齋の如き、物徂徠の如き、其他太田錦城、太宰春臺等の儒學士は如何、彼等の肺肝其儘とも見るべき彼の論孟字義、徂徠問答、梧窓漫筆、聖學問答等の著書に依つて明らかに知り得べからずや。彼等は皆一種の宗教的敬虔の念と、不動の念とを具備して、其信念と其態

度とは、彷彿として箇中の消息に躍如たるものあるを見ずや。唯彼等は自ら宗教に入りて、亦自らこれを知らず、宗教としての全活用、全益路を辿り得ず、過つて宗教無用の聲を發せるに由る而已。其以外に於ても、加茂真淵、本居宣長、平田篤胤の如き國學者連、さては亦、藤田東湖の如き日本主義の人も皆、燃ゆるが如き所信を以て所謂大和魂を鼓吹し、忠君愛國を宗旨と爲したるにはあらざる歟。然り、斯くの如く雜多ながらも、無中心ながらも、不統一ながらも、我邦古來より信念界の豊富なる、熱烈なる決して世界の人後に落ちざるものありと謂ふべし。

信仰とは信す、へきみとを懼れず、躊躇せず信するを言ふなり。  
 信仰とは信す、へからざることを信するにあらざるなり。  
 (永安錄)

日本人の宗教的觀念

### 三、日本の宗教的雜多の信仰

チヌク、人のイカナム、山を神禮せるが如く、我れにも富士山を神禮せる扶桑教あるにあらずや。墨西哥の昔人がカテベツクの岡丘を國民の母なりと崇拜せしが如く我れにも亦、御嶽山に神事する御嶽教あるにあらずや。支那の泰山を祭るが如く、印度の雪山を拜するが如く、我れに於ても亦、淺間山の崇拜、大山の崇拜、某嶽某山等、山の崇拜は到る處に今猶ほ絶へず、我國信仰界の一部に流行しつゝあるにあらずや。

白露人の海に髪を献じて、無病安寧を祈るが如く、我國の舟夫も亦、颯風怒濤の時に際りては、海上の安全を祈るに髪を断ちて海に献じ、金毘羅の名を呼ぶにあらずや。神武の皇兄海に投じて祈り玉ひ日本武尊の妃も亦、海神を宥めむとして身を鯨波に委し玉ひたる

が如き信仰は、今も猶那古浦の匿氣樓(伊勢四日市の海面にありて現はれ神靈の熱田に行幸し玉ふと云ふ信仰)の信仰に於て見ることを得べく、現に今猶其土人の頭腦を支配せるにあらずや。山に對しては大山祇神と稱し、海に對しては大綿津見神と稱するを始めとして、雨には高龍神、雷には火雷神、さては亦、日月、火水、風雨、雷電等の、自然物の個物其儘を神として、信仰の對象とするは古代未開の信仰に止まらず、現代の信仰に於ても今猶大に行はれ居るものあるを見ずや。

我は問ふ、蝦夷人の熊を神として祭るを野蠻なりと笑ひ能ふの資格ある歟、北米のジュンキンキイト、人の熊能く人に化成せりとの信仰を野蠻なりと笑ひ能ふの資格を有する歟、支那人の人、化して虎となり、墨西哥人の呪巫、化して獸類となり、亞非利加の一民種の酋長は能く動物に化成するの幻術あり等の信仰、若くは我國の古

代に於て蛇類を畏敬し神事して祭れるの類、此等動物崇拜を捉らへ來りて能く、現代の人は野蠻として之を改めざるべからず、蒙昧の行爲として之を啓かざるべからずと、且鑿し、且憫れむ程に信仰界の資格を有し居るや、否や。

私は更に問ふ、白露人の烟草を目して神聖草とし、之を崇拜するを評して、印度人の蘇麻草を禮拜するを評して、チブチヤ人の「こか」を以て神通を得る媒介力ありとするの信仰を見て、我國古來より古樹に注連を張り、主神ありと信仰するものを見て、今日の人、これを眞面目に未開なり、迷信なりと言ひ能ふ丈の資格を有し得るもの幾許かある。吾人は這箇の消息に會ふ毎に嗚咽痛息、未だ會て慨嘆せずんばあらざるなり。我國信仰界の赴くところ、滔々として迷信の巷に走り、昏々として蒙昧の風を脱せず、一より二、二より三、勃起續發、欺瞞百出、迷信に次ぐに迷信を以てし、蒙昧を誘ふに蒙昧

日本の宗教的維多の信仰

を以てし、一發千集、百出萬來、蟻の甘に寄り集ふが如く、蠅の臭に寄り附くが如けむ。而して蒙昧を釣るに迷信を以てし、迷信を利するに欺瞞を以てす、君子乏しく、聖人稀れなるの時に際り、昏々滔々として、天下比々皆是れに走る、豈亦宜ならずとせんや。

### 一、日本の首府としての東京

人は言へり「伊勢屋稻荷に犬の糞」と、この里諺は花の江戸時代の名物として繁昌を極めたる事實ならずや。當時伊勢屋の多きこと豈唯五歩に一樓、十歩に一閣而已ならむや、犬糞の多きこと豈亦支那朝鮮の市街に譲らむや、而して今や其雨ながら然らず、獨り稻荷に至りては其勢猖獗、江戸の時代、花の里諺を今猶依然として稻荷の兩肩に擔はしめつゝあるを見る。文明の魁、智識の中心、現代の原動地、日本の首府たる東京の活天地にして猶、倍動物崇拜の大に

日本の首府としての東京

日本の首府としての東京

流行しつゝあるを異しませんがあらず。  
請ふ吾人をして其事實に徴せしめよ、見ずや、古來東京に在りて其  
有名なるものを王子稻荷、玉姫稻荷、穴守稻荷、三圍稻荷、鐵砲州の稻  
荷、谷中菴守の稻荷、田圃の太郎稻荷、池上の長榮稻荷とす、其外稻荷  
の小祠、小社の類に至りては、實に擧げて數ふべからざる也。  
江戸土産圖會に曰く。

二月初午、王子稻荷參詣とて飛鳥山のほとりより老若男  
女群集して百度參りの數取りの、さし社邊に滿てり、山に  
いたりて狐穴を拜し、赤飯を捧げ奉りかへりまふしに王  
子社へ遙拜しぬ、傳へいふ此稻荷は關八州の頭領なりと  
て毎年極月晦日の夜、狐あつまりて鳥居にいたり官位の  
差別あるよし其時の衣裳揃とて田の中にあり、此所に集  
りて社の方へ行く、近年殊に靈驗あらたにて毎月午の日

の參詣引きもさらず、轅提灯道路に滿てり。

此等の崇拜の流行も時ありて變遷推移せり、流石に時めさし王子  
の稻荷も忽焉として當年の面影を失ひ、谷中の菴守之れに代りて  
繁昌を極めしも、幾許もなく田圃の太郎出て、菴守盛色を失ひ、羽  
田の穴守突出して、太郎亦顔色なく、今や池上の長榮、時を得顔に盛  
装して鼓吹に餘念なきにあらずや。嗚呼、文明の利器たる瀛車電車  
の便をかりて參客を迷信の穴に引込み、賽者を蒙昧の巷に誘ふ、豈  
慨嘆の極みならずや。

單り動物崇拜のみにして已まざる也、自然物崇拜以下各種の崇拜  
も亦、この地に甚だ熾んなるを見る。石尊權現參り、高輪の石神詣て、  
富士參り、惠方詣て、曰く酉の市、曰く比翼塚、曰く鼠小僧、曰く鬼坊主、  
曰く何、曰く何………

東京都人士の宗教的信仰の幼稚にして且網羅的なる、宛然一幅の

日本の首府としての東京

宗教全圖畫を觀るが如し。天然物崇拜、動植物崇拜より英雄崇拜、無限崇拜の類に至る迄、悉く收め盡くして亦餘蘊なきに似たり。中央の首府たるもの猶斯くの如し、地方の未だ以て迷信を脱せざる亦宜ならずとせひや。

## 二 宗教的都市としての京都

吾人京都の地に到りて先づ吾人の眼眸に映ずるものは何んぞや巍々たる伽藍、煥焉たる殿堂は、三十六峰、四圍の山、層巒幽邃の裡、白雲岫より出づるの處、秀逸して雲を凌ぎ、聳へて蒼穹を衝き、莊嚴堂々たるものあるを見ずや。西の方本願寺、東の方大谷廟、街衢條々、人馬絡繹の間に介在し、屹然として輪煥を競ひ、あるを見ずや。由來京都は宗教的都市なりと云ふ、宜なる哉、宗教的機關の豊富なる、吾人他に其比を見ず。然らば則ち、江戸の武備的に發達せし如く、

大阪の商業的に進歩せし如く、今の横濱、神戸の開港的に膨脹せるが如くに、京都も亦宗教的に成功を告げざるべからざるは理の當然なり。然れども事實は之れに反せり、然り大に反せり、今少しく實例を取つて證せしめよ。庶物崇拜に在りては、彼の愛宕江文山後の三個の石壺は如何、一は日壺と稱して晴天を祈り。一は風壺と稱して請風に賽し、一は雨壺と稱して雨を禱るに効ありと信ぜり。其外に於ても、三寶寺(葛野郡にあり)の歌石、融通寺(來迎院村にあり)の獅子石等、此等庶物崇拜の對象類少からざるを見る。彼の伏水街道の稻荷神社は、倉稻魂命を勸請したるものなり、元來狐と何等の關係なき筈なるも、傳説附會の過誤は、稻荷と云へば狐、狐と云へば稻荷、始終離るべからざる實現となれり、この社は狐の根據地として其名聲高し、幾多の攝社末社は、森々たる古松老杉、幽暗谿谷の間に、點々斑々として處々に小祠小社を設けて、迷信の賽客を待てり。詣者

穴あれば拜賽し、老樹あれば之れに媚びぬ、之れを『山廻』と云ふ。常識の人一度、この山に到り觀れば、殆んど驚倒せざるものなからむ。和漢三才圖會に曰く。

宗教的都市としての京都

本朝狐諸國に之れあり、唯四國には之れなきのみ、凡狐は多壽にして數百歳を経るもの多し、而して皆人間の俗名を稱す(田圃の太郎、大和の源九郎の如きこれ也)相傳ふ狐は倉稻魂命の神使なりと、天下の狐悉く洛の稻荷社に參社す、人稻荷社を建て、狐を祭る。其祭る所のものは位、他の狐に異る乃至小豆飯、油熬物を好む。

信くの如くにして動物崇拜に添ゆるに、植物崇拜を以てせり、其甚しきものに至りては生殖器崇拜の既に行はれたるを見る、少くとも今猶其遺風の全く相去らざるものあるを見るにあらずや。『迷信の日本』は已に業に之を絶叫せり曰く。

伏水の稻荷の後丘に御倉上殿と謂いて、宇賀御魂神、伊弉諾尊、伊弉册尊、の三神を祭つてある、毎年二月初午の日、本社に參詣する遠近の士女絡繹織るが如き雑踏で、なかなかの繁昌である、沿道の人形店に賣つて居る着色塑製の男女生殖器を買つて神前に捧ぐる習慣があるので、如何にも陰莖崇拜とほか思へない。

其他京都には、女御田の迷信、三年阪の迷信、祇園禪穴の迷信、一條戻橋の迷信等、數ふるに遑あらざるものあり、嗚呼、宗教的都市としての京畿の地斯くの如く其れ甚しきを致せり、我國の迷信多き豈驚かざるを得んや。見よ、俗信奇行の波及は、邊陲の果てに迄到れり、東より西、北より南、北海臺灣は言ふを待たず、東海東山北陸の諸道より、南海西海、山の陰陽に跨りて徧布せざる所なし。迷信や、奇行や、心理に現はれては、不廉不潔となり、風俗に表はれては、野風蠻俗とな

宗教的都市としての京都

い倫理に顯はれては破倫没徳となれり。我國各地の宗教的風俗を子細に點檢せば、百鬼夜行、異類異形の姿を呈せるものあるを見るべし。東西兩京に於ける信仰界の一部を擧ぐるも猶前に陳ぶる所の如し、況んや山又山、隈又隈、地隔て、道絶ゆる邊陲なるもの、在昔、王化の澤、明教の徳に沾ふの便少きに於てをや。其迷信奇行の遺風脱却し難きは亦止むを得ざること、謂ふべし。地方に於ける迷信奇行の習俗は煩雜に堪へず、茲に省略しぬ。次項に至りて更に我國の信仰史を叙列して以、各時代の信仰變遷に鑑みる所あらむ。

#### 四、日本信仰歴史の縮寫

##### 一、上世

時間の方面、過去二千有餘年間の信仰史を茲に叙列せんか。我國上世に於て既に各種の迷信崇拜の發せしものあるを見る、就中、卜占

禁厭の行はるゝ頗る甚し矣、後ち印度思想の來れるに會し、支那思想の來れるに依りて、在來の信仰なるものと混同雜糅し、統一もなく、中心もなく、其弊の出づる處、卜占禁厭と相合して、各種の迷信を生ぜり。分岐して亦、修驗道となり、陰陽道となり殆んど底止するところを知らず、迷信の弊、妖教の害は、國民を蠢惑すること日を逐ふて熾んなるに至れり。去れば天平元年に至りて、勅を天下に下し玉へり、曰く。

抑も民間に在りて、異端を學習し、幻術を蓄積し、魔魅呪咀して百姓を害ひ傷る如き輩は、首謀は斬に處し、從者は流にせん、若し又山林に停住し、詐りて佛法と道ひ、自作して他を教へ、傳習して業を授け、印を封し符を書し、藥を合せ毒を作り、百方怪を作し、勅禁に違犯するものも罪また前に等しかるべし(日本宗教風俗志に依る)



日本信仰歴史の縮寫、上世

妖教荼毒の害、蔓延して猶熾まざりければ、其翌年再ひ勅を下し玉ふに至る、曰く。

此頃安藝周防の國人等、妄りに禍福を説き、多く人衆を集め、死魂を妖祀し、こゝに祈る所あり、又近京左側の山原にも多人を聚集し、妖言を爲して衆を惑はし、多きは萬人、少きは數千に及ぶ此の如きの徒は深く憲法に違へり云云

(日本宗教風俗志に依る)

ト占の濫用、修験の妄行、陰陽の妖言は、打ち混じ入り紊れて、一齋に濫發せり、當時の迷信多き心を以て、此等の濫發と誘惑とに遇はゞ、萬仞の高きより石を投ずるが如く、滔々として天下、邪横弊竇の幽谷に陥らざるもの殆んど稀れなり。ト占陰陽の兩道は、驀然として進み入り、道教に混し、佛教に同して、跳梁跋扈を逞ふするに至りぬ。而して彼れ等は巧に禍福を論し、九星を説き、附會して縁を佛菩薩、

諸世天の名に附せり。曰く寅の年の者は毘沙門、辰の年の者は文殊、菩薩、己年は地藏菩薩、申年は觀世音等と稱する如きの例是れなり。加旃、曆書には彼の「忌み日」なるものを書き出したたり、曰く申の日は結婚を擧ぐるに悪しとして忌み、腹帯を爲すものは戌の日に限れりと唱へぬ。斯の類の迷信は奈良平安の朝より一層殷盛を呈せる跡ありしを認めぬ。ト占禁厭の迷信と、轉生輪廻の原義に暗きの弊は、愈出て、愈奇怪なり、人一朝疾患あるに會するも當時醫藥を用ゆる頗る稀れに、多くは唯ト占に頼むのみ、禁厭に依れる而已。畏くも三條上皇の眼疾を患ひ玉ふことありしは、猶醫藥を用ひず、妖言を放ちて曰く、朝家に怨恨を懐けるの輩、死して後ち天狗となり上皇の御頸に乗り掛り、其兩翼を展べて、御眼を覆遮せるが故なりと言ひ。比叡山に於て經卷を嚙むの鼠あるは全く、賴豪阿闍梨の變生なりと信ずるに至りぬ。天變も地妖も、病氣も、何事も皆、ト占

日本信仰歴史の縮寫、上世

加持にのみ依頼して以て左右し得べしと信じたりき、この類の信仰は能く當時の人心を支配し亦能く、當時の思想を認知するに難からずと謂ふべき也。

曾て太宰春臺の著、南留別志に左の如く言へり。

源氏物語を見れば、病に薬を用ゆることは少くして、おほかたは、祈禱をのみしたるやうなり、今も田舎のものは、かくの如し、鬼を尙べる風俗の弊なるべし。

此等纖弱迷信の弊、この時代最も熾盛を極めたるの跡あるを示しぬ。

## 二、中世

中世に入りては、平安の纖弱より一轉して、鎌倉武士の硬骨と化しぬ。彼れ等は名を尊びたり、義を重んじたり、強を挫き弱を極ひたり、

恩に殉し、忠に斃れたり、粗忽を戒め、卑怯を恥ぢたるなり、額に矢は立つとも背には矢を立てざる尙武の精神は愈發揮して、茲に一種廉潔勇邁の氣象を實現し得たりき、我邦之を稱して武士道と言ふ。見よ、彼の平家物語、那須與市、扇的の一段なるものを。

黒き馬のふとく逞きにまろほやすつたる金覆輪の鞍置て乗たりけるが、弓取り直し、手綱かいくついで汀へ向ひてぞあゆませける、味方の兵共與一が後を遙に見送つて此若者一定仕らうずると覺し候と申ければ、判官も頼もし氣にぞ見給ひける、矢比少し遠かりければ、海の中一段計り打入りたりけれど猶ほ扇のあはひは七段ばかりもあらんとこそ見へたりけれ、比は二月十八日の酉の刻計の事なるに、折ふし北風烈ふ吹きければ礮打つ波も高かりけり、船はゆり上げゆりすへたよへば扇も中中に定

らず、ひらめいたり、沖には、平家船を一面にならべて見物す、陸には源氏轡を並べてこれを見る何れもの、晴れならずといふ事なし、與一目をふさいて南無八幡大菩薩、別しては我國の神明、日光の権現、宇都宮那須湯泉大明神、願くはあの扇の真中いさせて、たまはせ、たまへ、是を射損ずるものならば、弓きり折り自害して人に二度面を向くべからず、今一度本國へ歸さんと思召さば、此矢はづさせ給ふなど、心の中に祈念して目を見開いたれば、風も少し吹弱つて扇も射よげにこそ成りたりけれ、與一鏑を取てつかひ、よく引て兵とはなつ、小兵といふてう十二束三ふせ、弓はつよし、鏑は浦響く程に長鳴してあやまたず、扇の要際一寸ばかりあいて、ひいふつとぞは切たる、鏑は海に入れば扇は空へぞ揚りける、春風に一もみ二もみもま

れて海へさつとぞ散たりける、昔紅の扇の夕日にかゝやくに、白波の上になゞよひ、浮つ沈つゆられけるを沖には、平家船をたゞいてかんだり、陸には源氏船をたゞいてどよめきたり。

この一段、如何に勇壯にして且悲哀なる、其名と其義とに勇みたる鎌倉男子の氣象は、彷彿として其面影の紙面に躍如たるものあるを認め得べく、而も亦、當時に行はるゝ信仰界の程度も畧ぼ察知することを得べからずや。

平安朝の末、鎌倉時代に移れる初期に涉りて、禪宗起り、真宗起り、時宗起り、法華宗起りぬ。此等の新勃興は、印度已來其儘の教義を摸擬的に、舊來の哲學的佛教の斷じて時弊を匡救し感化し能はずとの見地より出てたりき。禪宗の見性的は武士に歡迎せられ、真宗の易行的は普通的に信ぜられ、時宗の遊化的に淨土主義を布かれ、法華

宗の開顯的に統一を主張したる、新佛教の興起と、武士道の發達とは、鎌倉時代の花として稱へられ、雙美雙玉の姿勢を世に呈せり。然れども腐敗と墮落は、幾許もなく來り襲ふて、時代の花、双つの美玉を侵蝕して惜まざりき。平氏倒れて源氏起り、北條の九代能く泰平を謳ひたるも、高時に至りて、平氏の驕奢に倒れし如く、亦驕奢に因りて亡びぬ。足利氏代りて興れるも亦、花晨月夕、茗燕舞樂、政治を忽諸に附して、靈園池沼これ事とし、驕奢宴遊これ耽りぬ。是時に當り、群雄は四方に割據し、政令意の如く行はれず、治亂相尋き、興亡交至りぬ。然り、應仁の乱は花の洛陽をして、修羅の巷たらしめぬ。甚哉、禁庭の左右、櫻橘兩樹の下に茶店を出すに至らしめぬ。この變亂は能く、王法も佛法も並びに破滅に歸せしめ、諸宗の命脈を殆んど斷絶せしめたりき。

安朝に其芽萌を出しつゝ、ありし諸種の迷信は勃然としてこの間に乘じ來りぬ。卜占の流行、陰陽道の繁昌は、腐敗佛教の現世主義と相結び、加持祈禱と打ち混じて、種々の妖教(其最甚しきものを例せば)を唱ふるに在り、變行(其甚しきものを例せば、理智冥加とは男女の交合なりとの怪説、猥儀をなして懼らざる)に變行を誘ふて世を荼毒するの甚しきものあるに至りぬ。

かゝれば濟世を托し、利民を圖る、教も、道も、萎微腐敗の裡に埋没して最早、感化の動力も、何の力も皆悉く失せ了しぬ。茲に於て乎、間乗すべしと爲したるが如く、恰好、天文年中より永祿に掛けて、一再ならず耶蘇教は我れに入り來りぬ、織田信長の之れに傾聽して諸候の中にも亦、之れを信ずるもの少からざるに至りぬ。南蠻寺の築造は其實現と見るべく、安土大成寺の建立は、其勢力とも見るべし。然り、然りと雖も、利害の弊は、常に免れざるもの、彼れ等宣教師連は、人

を誘ふに權謀を以てして多く誠實を欠ぎぬ。然り、理化を應用して奇術的に愚民を誘惑したりき。愚民は以て不可思議とせり神明難有と信じたりき。甚哉、彼れ等は國體を蔑し、兼ねて亦、神儒佛の滅亡を企圖したりき。豊臣秀吉起るに及び、國家に害ありと爲し、直に南蠻寺を毀ち、宣教師を追ひ出しぬ。茲に於て耶蘇教を國禁としたり。彼れは之れを禁すべく左の國禁令を下しぬ。

定

- 一 日本者神國なる所、さりしたん國より邪法を授候儀甚以不可然事。
- 一 其國郡之者を近付け門徒に爲し神社佛閣を打破る前代未聞候、國郡在所知行等給人に、被下候儀は當座事に候、天下よりの御法度相守諸事可得其意候處に下々として猥儀曲事候事。

- 一 伴天連其智惠の法を以て心さし次第檀那を持候はんと被思召候處、如右日域之佛法を打破候事曲事候條、伴天連儀日本之地には被差置間敷候間、今日より二十日の間に用意仕可歸國候、其中下々伴天連に不謂族申懸者あらば可爲曲事。
- 一 黒舟之儀は商買之事候間各別に候、年月經諸事賣買可仕候事。
- 一 自今以後佛法之妨を不成證は商人之儀は不及事候何にてもさりしたん國より往還不苦候條可成其意事。

天正十五年六月十九日

御朱印

三、近世

中世の宗教信仰、概ね斯くの如くにして、近世徳川氏に移りぬ。徳川

氏は劈頭に於て、耶蘇教を嚴禁し酷責に處したりき、彼れは獨り耶蘇教を嚴禁したるのみならず、嚴格なる折伏主義を持したる妙滿寺の日經をも貶斥したり、不受不施派も亦、嚴禁したりき、常樂院日經、妙覺寺の日奥等堅く執つて屈せず、此等硬骨男子出て、昂然主義を曲げざるの一事は、怯懦節操なく主義なき宗教家の多き時に當りて、確かに時弊の一針砭たるを失はず。徳川は此等の禁制の上に更に儒學にも亦、正派と異派との區分を立てぬ。曰く、程朱の學を正學とし、他を悉く異學として遇しぬ。彼れは正學派を採用したり、彼れは異學派を斥けたり。正學の巨人としては藤原惺窩あり、其門人林羅山ありて共に、幕府文教の權を握りぬ。之れに反して陽明主義を執り、知行合一を唱道したるものは、異學派の中江藤樹なり、彼れは德行を以て夙に聞ゆ、近江聖人の名を以て稱せられぬ。其門より熊澤蕃山を出せり、彼れは治世産業の上に能く陽明主義を應用

したりき。外に在りて木下順庵、新井白石、室鳩巢、雨森芳州等の濟々たる多士は中間の重鎮として、彼等は皆程朱に偏せず、陽明に黨せず、博識居中、一個の自信を以て自ら立てり、世之を本門の名士と稱しぬ。別に又南村梅軒を宗とせる、南學と稱するものあり、谷時中、野中兼山等は皆其門より出てたりき。程朱に疑を容れ、宋儒を排して更に古學を唱道したるもの伊藤仁齋あり、其子東涯あり。豪放磊落一世を睥睨し、朱子學を排斥して別に古文辭學を興したる荻生徂徠あり、彼れ壯語すらく、道なるものは禮樂刑政にあり、學ぶ目的は天下の經綸にあり、區々一身の德行を修むるに汲々たるが如きは、抑も末技末藝のみと。之れに反旗を樹てたるものを井上金娥とす、これを折衷派とも稱しぬ。太田錦城、山本北山等の名士は皆、この學派を踏襲し唱道したりき。盛なる哉、學派と學派は、蘭菊其美を争ひ、主義と主義とは、各其所信を貫きて競ひぬ。耶蘇教の嚴禁、常樂院日

經の迫害、不受不施派の禁制、儒教異學派の禁止等。禁制又禁制、下令又下令、戒飾甚だ努めたりき。然れども、猛烈なる信仰の下に立脚したる彼れ等宗教徒は、犧牲猶避けず、彼れ等は死を以て其信仰を買ひたりき。寛政改革の時に當り、更に程朱を採りて異學を禁じたるも、然れども是れ亦、區々たる異學禁制令のみ、曷んど彼れ等學者の腦緯に醗酵せる所信を壓迫し得んや。

この外に於て我國の敬神方面を觀るも、彼れは遠く本地垂迹の説出で、兩部習合の説行はれて以來、敬神思想は發して形體を造り一種の宗教的組織を呈せる神道なるものとはなれり。これよりして更に亦、唯一神道派を生み出しぬ。唯一派は兩部派と全く異なれり、彼れは稱せり、神道は根本なり、佛教は枝葉なりと、彼れは全く反對の主張を持しぬ。然れども其實は、依然として眞言の儀式を踏襲せり、神道護摩、神道加持、神道灌頂等の如き儀典是れなりとす。唯一派

より出で、神道に大改革を行ふたる傑物、吉川惟足は單に敬神思想の上に立ちたる神道に加ふるに道德的應用を以てし、更に進んで儒教と調和せんことを努めたりき。恰好、この時儒學の大家、山崎闇齋は惟足の門に入り來りて神道の堂奥を叩き、亦他に出で、更に學ぶ所あり、自ら得る所を以て、神道の垂加派を唱道するに至りぬ。蓋し唯一派以來、垂加派に到れるの間其主張學說共に、大に注意を惹くに足るもの多し。然り、然れども、これよりして後、黒住教出て、神習教(烏傳神道と稱するもの)出で、禊教(とおかみ教と稱するもの)出づるに及び、無學無識の徒、漫りに神道の名を利用し、實行の名の下に、禁厭是れ事とし、祈禱是れ事として、欺瞞籠絡殆んど至らざるなきに及びぬ。搦て加へて漸次に亦、三世相的迷信も流行し來りて茲に迷信の鼓吹機關は愈發達し來りぬ。

日本宗教風俗志は三世相大雜書を引き來りて、曰く。

日本信仰歴史の編纂近世

當時諸種の迷信行はれ、禁厭卜占の事頗る煩雜に、曆には二々日の吉凶を示し、●印を付して其日は黒日、又受死日といひて大悪日を示し、其他往亡日は天の荒神の守る大悪日なり、天火日、地火日も五行の氣、相克殺するの日なれば、天火日には棟上を避け、地火日には柱立を忌むといひ、天教日、大明日は萬事に吉なりなどといひ、曆以外に於ても左の日は諸事に用ひて、十倍の利ありといひ。

歲德日、德合日、月德合日、吉慶日、

幽微日、萬德日、活幽日。

佛事心願には、三寶吉日を撰び、奉公人を定むるには天宰を用ひ、結婚には和合日を卜し、種蒔には天福日、井戸掘りには地福日、出家には七難即日、商ひはじめには如意日、撰び、八龍日、七鳥日、九虎日、六蛇日を以て四季の悪日とい

ひ、曆に夜行かすと記るされたるは、百鬼夜行なりといひて、これを忌むの類、殆んど枚舉に遑あらず、當時三世相大雜書と稱する書は、干支によつて、これらの日を明かし、且つ五行によつて人の性質を定め、男木女木なれば木と木と相並ぶか故に和合すべし、されど又木と木と相摺つて火を生ずるが故に、口舌絶へずとか、男木女火なれば大吉なり、男火女木なれば大に悪しなどといひ、生年月日によつて一生の吉凶を説き、前生の因縁を示し一代の守本尊を示す、

子は千手、丑寅どしは虚空藏、辰巳に卯は文殊なり、午勞至、未と申は大日、酉は不動に、戌亥阿彌陀を  
と其他雜占を説き、地震に就ては、九はやまひ、五七は雨に、四つひてり、六つ入つさはぎ、いつも大風、

日本信仰歴史の編纂近世



日本信仰歴史の縮寫近世

なぞといひて、其時刻によつて天氣を卜し、或は天氣によつて人事を卜し、正月元日の雷は人に禍すといふ、立春の日、東より吹く風は凶なり、冬至の日、北より風吹けば年豊に民たのしむといふ、動物の行動によつて晴雨を卜しては、犬草を噛めば晴天のしるしなり、牛地をかき天に向ひて首をあげるは大風吹くしるしなりといひ、これを人事に應用しては、鼯多く集て鳴くときは其家に不祥の事あり、鼠夜々壘の間の埃をかきあぐれば悦事あるべしなどといひ、燈火を以て吉凶を卜しては、灯に物もさわらず、風も吹かぬに所由なく消ゆれば不幸のしるしなり、灯に花の生ずるは吉事なりといひ、又夢を以て吉凶を卜し、若し悪夢を見るときは『婆珊婆演帝』との咒を書きて寢所の上

信じ、釜、蒲團、枕、等に其形を圖して悪夢を避けり、尙悪夢を吉夢に轉ずるには、人に語らざる中に先づ水を合て東方に向ひて吹き唱て『悪夢若草木好夢滅珠玉無咎矣』との咒を唱ふれば善事となる、又左の咒を書きても、よしとぞ。

# 日日鬼 噫急如律令

これ等雜占の外、禁厭に就ても種々の法あり、盜賊入りし時、

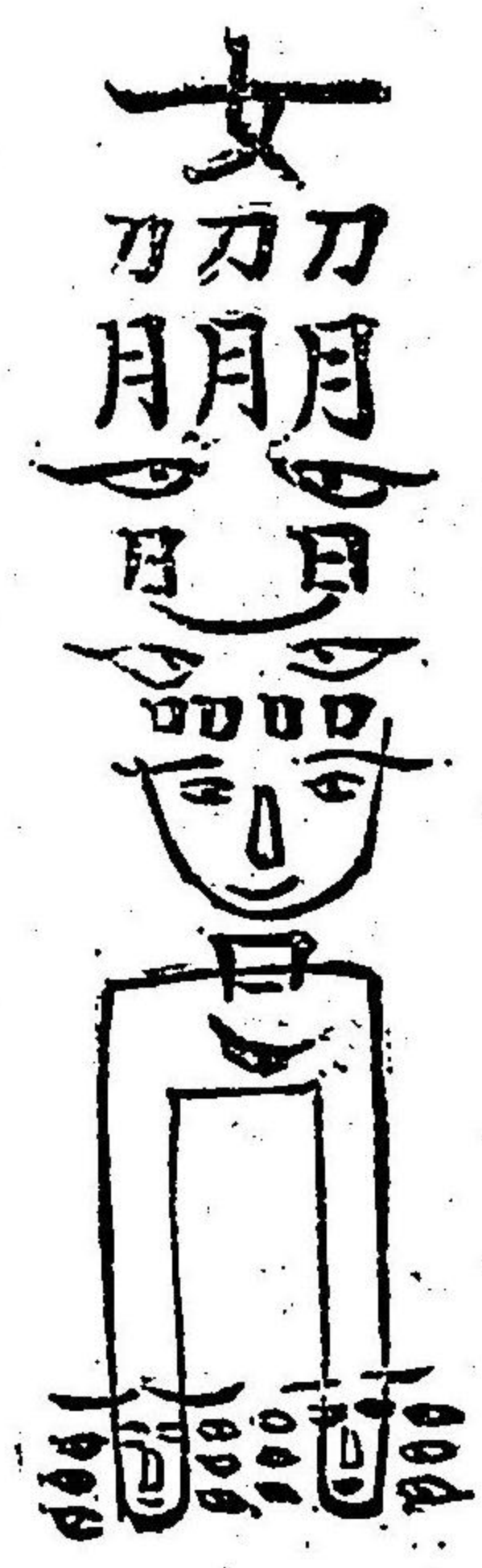


右の符を貼れば必ず顯はるゝといひ、

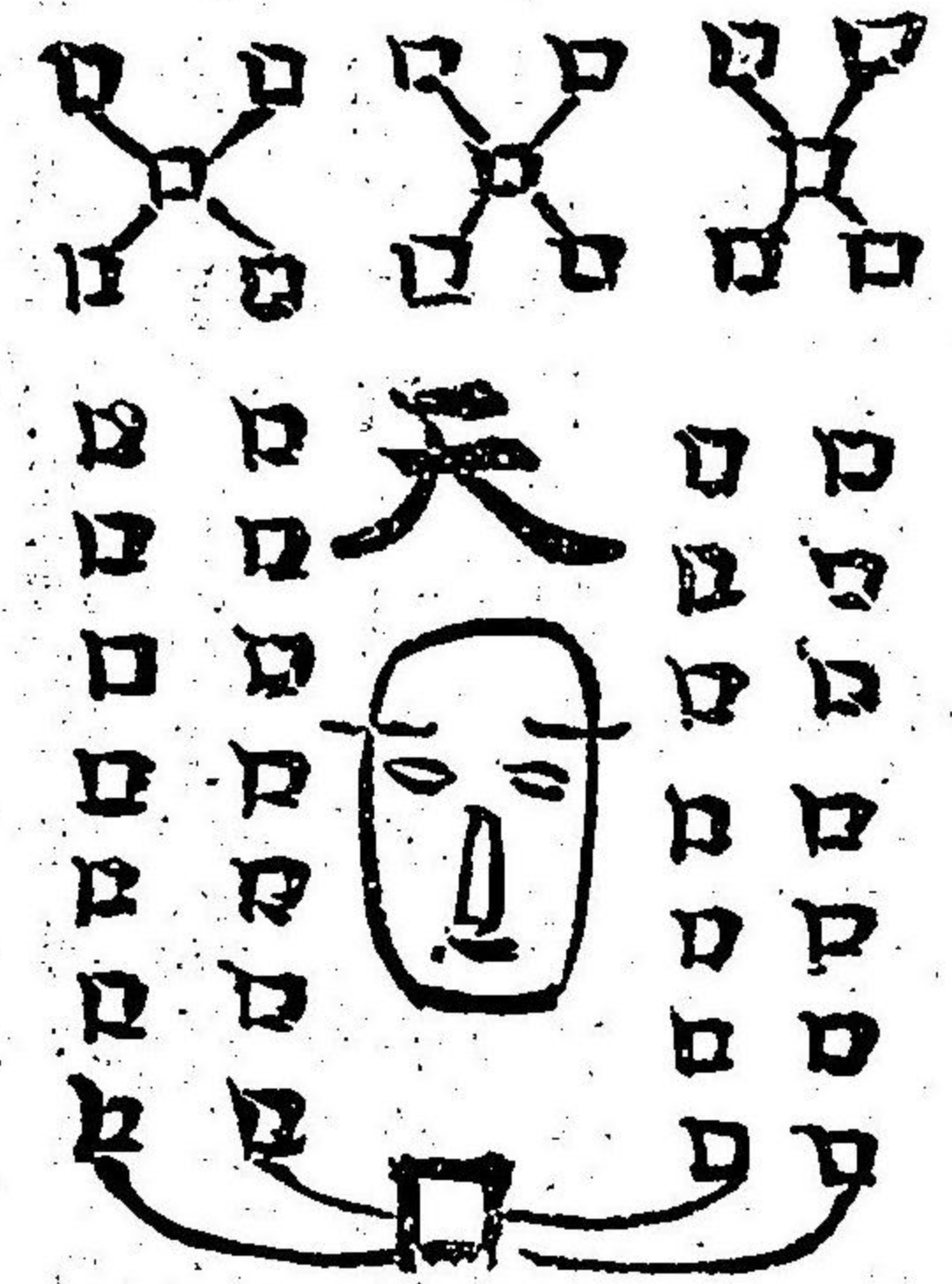
日本信仰歴史の縮寫近世

疫病を攘ふには、

日本信仰歴史の縮寫近世



の符を書くべしと示し、  
人に愛敬せらるゝには、



鬼唳急如律令

右の符を書きて首にかけよといひ、甚しきは喉に骨の立ちたる時は「鵜の喉く」と三遍唱ふれば必ず抜けるといひ「夜中是鬼」と掌中に書き堅く握りて歩むときは決して怪しきことなしと云ふに至る、眞に笑ふに堪へたることなり、これらの符咒に就ては其書様こそ尤も研究すべきものならずや、三世相はこれらの卜占禁厭外、人相手相のことを示し家毎に一本を貯へらるゝに至りき、勿論此書に載する諸種の迷信は多く平安朝時代より傳はりたるものなりと雖も、當時に於て尙ほ盛んに行はれて今日に及ぶも未だ其迷を破る能はず、當時神社佛閣に御圖なるもの行はれ謹んで御圖を取り、其籤文によつて吉凶を卜すること流行しぬ、この御圖は元三大師の述作と稱し願る信仰せられぬ、元三大師は平安朝時代の人、慈惠僧正

日本信仰歴史の縮寫近世

日本信仰歴史の縮寫近世

と稱し天台の座主たり、永觀三年正月三日を以て寂せられしを以て此名あり、又これを角大師といふ、蓋し大師惡魔降伏の法を修せられし時、鬼形に變じて見ぬたまひしかばかく云ふなりとぞ、御圖は細き竹にて作り、それに各番號を付して、一より百に至り、丈一尺四寸四方の箱に入れ、其箱に竹の出づべき穴をあけて、これを振り出し、縁談失物等を卜するにて、例せば一なれば大吉、七寶浮圖塔、高峰頂上安、衆人皆仰望、莫作等閑看」とありて一々之れを解釋し、五なれば凶、家道未能昌、危々保禍殃、暗雲侵月桂、佳人一炷香」とありて一より百まで各其判斷あり、今も猶ほ行はる。

と、縷々這種の迷信に陥れるものあるを慷慨したるが如く、三世相的、混合煩雜の迷信は猶ほ未だ脱せず、今現に俗間の精神を司配し

つゝあるにあらずや。就中、其迷信の癖性あるものに至りては、實に驚くべきものあり。彼れ等は何事を爲さんとするも、何事を起さんとするも一々に吉凶の判斷に依りて左右せらるゝなり、迷信の弊も茲に至りて極まれりと謂ふべし。

加旃、應仁の亂後は、天下漸く治り、山川跋涉の便、諸國交通の道開け來れり。遠く上古の山嶽崇拜の思想は再發し亦分岐して、千社詣となり、千箇寺参りとなり、西國巡禮となり、四國遍歴となり、六部の行脚、虛無僧の遊行となれり。彼れ等の起原に於ては、必らずしも否定すべきもの而已にあらざるべきも、其弊害の出づる更に甚しきものあり。彼れ等の多くは終生、不生産的となり、遊惰の民となり、一生乞食とならざるもの稀れ也、然らざれば奸譎となり、盜見となり、其甚しきものに至りては強盜と化し去ることさへもあり。當時諸種の迷信は各種の信仰と相結合し、各種の誘惑と打混同して、倍々其

度を昂進せしめたりき。森尚謙彼れの如き、朝河善庵彼れが如き大學者すら猶ほ、天狗、狐狸に對する信仰の甚だ深かりしを見る而已ならず、堂々たる一國の政府を以てして猶ほ且、彼れ等天狗を遇するに、一種の信仰を以てしたりし事實あるにあらずや。

幕府當時の『布達』を見るに曰く。  
來西四月日光御社參被仰出候依之是迄御山に住居候天狗並降魔神御社參相濟候迄其御山可立退者也

文政七申年七月

水野出羽守

天狗共  
降魔神共

同じく又『布達』に曰く。

來西年將軍家日光御參詣被仰出候時之執權衆與利山中江制札被相建之條尤之專候畢依之御參詣中城州鞍馬並

愛宕者勿論遠州秋葉豐州彦山等分山可有之候

集 人花押

日光

大小天狗中

これ豈面白き滑稽事ならずや、政府の勢力に依るも猶ほ怖畏の念に驅らるゝ斯くの如し、他は以て知るべき而已、頑愚の輩に至りては、益迷蒙に陥り愈其甚だしきを加ふ、眞に憫れむべきにあらずや。

四、明治維新

紛々擾々、天下の形勢相迫り、徳川の末路と明治維新との中間橋を渡らむとするの頃、明教地を拂ひ、道心微薄なるの時に乘して、嵯岡金光教は、俗物、藤井文次郎の計に依りて、備中に創唱せられ。天理教は、妖婆、中山ミキの口に依りて、大和に創唱せられ。蓮門教は、愚婦、島

日本信仰歴史の縮寫、明治維新

日本信仰史の縮寫、明治維新

村ミキの手に依りて、豊前に創唱せられぬ。先發せる彼れ黒住、神習、若くは心學派に至りては、多少學識を有するもの、手に依りて、組織せられたるものに係れども、然れども金光、天理、蓮門の婦祠創立者輩に至りては全く、無學無識、普通人以下の人、常識を以て律すべからざるの徒のみ。彼れ等の迷信的鼓吹、婦祠的行動に於ては、今日現に彼れ等の團體に依りて、吾人の前に行はれつゝあるにあらずや。就中、天理教今や最も盛色を呈しぬ、彼れ等は神前に出て、男女相混して、舞踏し且婦唱せり、彼れ等の男女混淆、婦心誘起の媒を爲すの醜、到底廉潔の眼を以て觀るに忍びざるものあり。……

眼を我邦の信仰界に放ち視るに異類異形、混亂雜多、殆んば名狀すべからず。憲法の保障は、吾人の宗教信仰の上に與へられ、自由の信仰を撰び得るの幸福は、享け得たりと雖も、信教自由の恵みは聽て

宗教團體の濫發續出となり、雜然として精神界の中心を失ふて茲に至れるにあらずや。看よ、今や新進氣鋭の者は科學的研究組織に據りて得たる新信仰を歡迎せんと努めつゝあるを。反之一方に於ては教權の楯に籠り、舊教條を主張しつゝある、各教、各派は共に依然として、自家自流の牆壁を築くに忙がはしく。吾人を以て之れを觀るに、必ずしも兩ながら不可なりと言ふべからず、亦未だ必ずしも佳矣とのみ斷ずるを得ず。吾人は之れを疑ふ、新派の所謂健全なる信仰とは何にものを意味するかを、惟ふに彼れ等は無論、讀んで字の如しと答ふるなるべし。然れども信仰の實現に於ても亦、新派連の人格に於ても、健全なる信仰は未だ以て、彼れ等新派の專有物視するが如き、慢言に傾聽するを得ず。之れと同時に、教權派に對しても亦團體として、健全なる信仰を把住せりと認むるを得ず、然り、大に聽すを得ざるなり。吾人は信ず、今日の信仰界に於ける事實

日本信仰史の縮寫、明治維新

A man should never be ashamed to  
own he has been in the wrong, whi-  
ch is but saying in other that he is  
wiser to-day than he was yesterday-  
Pope.

Sweet mercy is nobility's true badg-  
e. Shakes peare.

日本信仰歴史の縮寫、明治維新

日本信仰歴史の縮寫、明治維新

は恐らく、一言にして能く評し盡くすを得べしと。曰く、健全なる信  
仰の有無は、新舊の派別を以て分つべからず、曰く健全なる信仰の  
存亡は教派の區別を以て上下すべからず。所以者何、現時の信仰界  
は實に、混濁不調、雜然として統一なく、危然として旨蹄なし。吾人の  
眼に映ずるところの信仰の實現を以て之れを評せば、何れの教派  
も皆、健全なる信仰を他に誇示するに足る程のものなく、何れも皆  
悉く、不健全なる病的痼疾の信仰に陥りつゝあるにあらずや。若し  
夫れ健全なる信仰を稀れに有して稀れに行ふものありとせば、是  
れ個人の信仰のみ、是れ家庭の信仰のみ、舊派として、新派として、團  
體として、抑も亦教權として健全なる信仰旗を擁立して、別に一異  
彩を放ち能ふ程のもの幾許かある、嗚呼、我邦の信仰界は實に亂調  
なり、薄弱なり、幼稚なり、不統一なり。信仰界の指導に任ずるもの、豈  
袖手傍觀して息むべけんや。茲に聊か我國の信仰史を縮寫して、讀

者の便宜に供する所あらんを希ふのみ。

齊一變至於魯、魯一變至於道。(孔子)

迷信奇行の國家の體面に及ぼす弊害

### 五、迷信奇行の國家の體面に及ぼす弊害

我邦は既に東洋の君子國を以て居り、文明國を以て任じ今や亦、戰勝の地位に立つて、尊敬を受けべき名譽の國にあらずや。然り、然れども宗教的信仰の状態に至りては、迷信蠻風猶未だ去らず、太古原始の信仰其盛の形體を存して、最底下の信仰部類に彷徨しつゝあるを見ずや。これを宗教上の教理論に鑑みて、其不可なるは論ずる迄もなく、國民の風俗に徴するも、道德の上に試むるも、迷信奇行の國家民人に與ふる害毒は、實に怖るべきものあるを見、且憫れむべきものあるを見る。讀者は前項に於て既に、東西の兩京に流行せる迷信の實例を擧げ來りしものを讀みたるならむ、更に信仰史縮寫の項に於ても亦、迷信の笑ふべく憫れむべき實例を引證せるものを見たるならむ。然も迷信奇行の弊害に就き、猶茲に一言の止むを

得ざるものありて存せり矣、曰く迷信奇行の昂進し來るや、獨り宗教問題に止まらず實に政治問題に關繫することは是れなりとす。國民にして若し生殖器を崇拜するの蠻行を來たせしとせば如何、彼れを崇拜する心理上の作用は、拜者をして自ら姪心を誘起せしむべく、自ら姪風を増生せしむべし。而して更に亦、彼れをして懦弱ならしめ、不廉ならしめ無耻ならしむ。更に亦、風俗をして壞亂せしめ、野蠻ならしめ、姪俗たらしむ。更に亦、破倫の奴となり、人非人となり、煩惱の犬とならしむ。豈唯洪水汎濫の恐るべき比のみならむや、豈唯コレラ、ベストの比のみにして止まむや。

この外に於て猶ほ、動物崇拜の蠻俗なるもの、庶物崇拜の野風なるもの、凡べて謂はれなき迷信崇拜なるものは、其國と其民との進歩の程度、智識の度合を計り知らるべき標榜なり、磁針計なり、晴雨計なり、鉢盂計なり、寒暖計なり、日印しなり、一國の資格に關係し來れ

迷信奇行の國家の體面に及ぼす弊害

るもの斯の如く夫れ大なり實にこれ國家の風俗問題なり教育問題なり衛生問題なり政治問題なりと謂ふべし吾人が宗教問題として之れを論ずるのみならず政治家は國家の利害を鑑みて教育家も學者も亦教育の得失を慮り一國の體面に係れるもの大なりと知らば其在朝と在野とに論なく重大なる論件として提供するに價ひある國家の事實問題たらずんばあらざるなりかゝる既行的事實問題にして未だ政治問題に上らず未だ教育問題にも出でざるは抑も何事ぞこの罪元來宗教家に重しとす然れども政治家の罪も教育家の罪も亦甚だ輕ろきを得ず宗教家は人の精神界を司配す未發に之を防ぐべく而して純信至仰に誘ふべし既に之れが形骸に發して國家の體面に醜を流すに至らば政治家は最早躊躇なく國政料理の塩梅として適當矯正の法救濟の道を講ぜざるを得ざるは當然のことなりとす然るに事未だ茲に出でざるは彼

れ等の無識なるに由る乎無頓着なるに由る乎何れにもせよ余れは惟ふ彼れ等は維新已來の長足の進歩に連れて各種の經營問題に汲々として日も亦足らず國家の新事業に營々として忙殺せられ形而上の宗教信仰に關する問題の如きは未だ顧るに遑なかりしに由れるならむと然れども迷心の内に動き昂進して外に發せば豈唯眼前の進歩不進歩の小問題にして止まんや實に社稷の安危に係れる大なる國家問題たらずんばあらざるなり吾人の眼孔には未だ迷信奇行の根絶を見ず吾人の耳朶に接觸し來れるもの不健全なる信仰病的迷信の而かも蠻的風行にあらざるもの殆んど稀れ也されば『日本宗教風俗志』は彼の『嬉遊笑覽』及びグリフィ氏の『日本宗教』を引きて迷信流行の事實を慨せるものあるを見る、曰く。

俗間は尙ほ符咒禁厭を信ぜり、五寸四方ばかりの赤紙に

迷信奇行の國家の體面に及ぼす弊害



馬字三個を品字形に書して馬痘瘡を免るべしと爲し、御嶽山三峰寺の狼の畫を貼りで惡事災難を攘ふべしとし、神社の狛犬の足を紙にて括る時は願ふ事叶ふと信じ、近くはインフルエンザの流行に際して其の染風といひしに因みて『久松留守』と貼札するものあり、天然痘流行の時には帝都の中央に於ても『鎮西八郎在宅』の貼札を見るべし、道に狂犬に遇へば虎と云ふ字を手の内に書て見すれば其犬必らず去るといふも今尙ほ俗間に行はるゝ信仰なり『嬉遊笑覽』に、人くらひ犬も虎と云ふ字を手の内に書てみすれば、くらはぬと、教へられ、後に犬を見て虎といふ字を書まゝ手をひろげてみせけるが何の詮もなく、ぼかしくふたり、悲しく思ひ、ある僧にかたりければ、推したり其犬は一圓文旨にあつたものよといへり云云と

迷信奇行の國家の体面に及ぼす弊害

俗間に行はる符咒禁厭の法大抵この類のみ、俗間は今日に於ても動植物を崇拜せり、秋葉の三尺坊、奥山の半僧坊等の天狗崇拜は云ふまでもなく、狐は稻荷神社の御使として終に狐其者を崇拜し、油揚を献じて蠟を買ひ、蛇は辨財天の御使としてこれを神聖視し、肥前杵島郡に猫大明神あり、猫を祭り、陸前の宮城野には銀杏老母神として銀杏を祭り、近江の唐崎には唐崎神社として老松を祭る、其他動植物に關する崇拜は盛んに行はれ、原始佛教の面影を今日に遺し、水火を崇拜して神れば病を醫するの力ありと信じ、火を以て災厄を攘ふべしと爲し、石塊を以て神の如く看做し、奇巖怪石には諸種の名を附してこれを崇拜す、常陸の鹿島の要石は深く地震の頂に達すといはれ、陸中の衣川には大石神社あり、相摸には大山石尊あり、殊

迷信奇行の國家の体面に及ぼす弊害

神信奇行の國家の林面に及ぼす弊害

に甚しきは生殖器の崇拜にして英語の所謂 Linga-worship  
若くは Phallic-worship これなり、蓋し生殖器崇拜は我が太古  
より行はれしものか、雙立せる山には男跡女跡の名を附  
して生殖器を祭り、道祖神の多くは石を以て作りたる生  
殖器にて全國到る處これを見ざるなし、

グリフイ氏會て『日本宗教』に於て生殖器崇拜を論じて曰  
く、

我等の間には既に凋落に歸したる此信仰が、何故に又如  
何にして番に神道と密接するのみならず、神道に依りて  
助成せられ、又其一部となりたるかは古事記に載せたる  
世界創造の傳説を讀みて容易に之を解するを得べし、神  
道に於て神聖なる此書の開卷、數節は宇宙創説を説明す  
る生殖器的神的なり、而して此神話と此信仰との存在は

此書よりも古くして、實に日本古代信仰の形象なり、父た  
る事の神秘は原人に取りては亦是れ宇宙創造の神秘な  
りき、彼は彼と其崇拜するものとの間に差別を立つべき  
思想も言語も之を有せざりしなり、

と、これ豈一概に妄誕の言として斥くべしとせんや、現今  
に於ける信仰状態は猶この原始の如きものあるなり、生  
殖器崇拜は國民の汚辱なり、これを一洗せざるべからず。

人は唯洪水汎濫の恐るべきを知れり、傳染流行病の恐るべきを知  
れり、而して迷信蠻行の國民を頑にし、邪にし、姦にし、愚にして國民  
を益感し、茶毒するの甚だ恐るべきものたること、洪水よりも、流  
行病よりも猶ほ甚だしきを知らざるものい如し。吾人は之れを知  
る、河川の改修、堤防の築造は以て、國家が常に汎濫に備ふるものあ  
るを、吾人は之れを知る、衛生上の奨励、潔清法の施行は以て、國家が

神信奇行の國家の林面に及ぼす弊害

豫め傳染病に防々ところのものあるを。而して迷信發行に至りては、單り其汎濫蔓延に委し去る、滔々汨々として、天下この禍害に罹らざるものなきは、亦宜ならずとせんや。

吾人は國家前途の祝福を念とすると共に、この禍害を芟除して、國民をして幸にこの禍害より免れしめんことを祈るもの也。

宗教の資格、合理的

## 六、宗教の資格

### 一、合理的の宗教なること

今人多く宗教を迷信物視す、宗教は然かく迷信の結晶體なる乎、曰く否、宗教と迷信とは體固より同じからず、意も亦異れり。宗教上の迷信は宗教の寄生物なり、寄生物豈宗教の本質なりと謂ふべけんや。然れども世人多くは、殊更に寄生物たらんを望むの風あり、而して宗教の本體に歸嚮するを知らざるものゝ如し。

夫れ宗教の本體に似而非なるもの、寄生して害あるもの、之を寄生物と云ふ。迷信と宗教信とは、恰も事物の體と寄生物の關係の如く密接なり、若し信仰にして一步を誤れば直に迷信に陥るもの、これ世の宗教信仰に於て常に多く見る所のものにあらずや。元來宗教は信仰を以て立脚とするものなり、然り信仰は宗教の立脚なり、信仰は宗教の生命なり。然れども吾人が信仰を捧ぐべき信仰の對象は、吾人が亦信仰を捧ぐべきものたらざるべからず。之を詳言せば、吾人の信仰を捧ぐべからざるものに信仰を捧ぐるもの之を迷信と謂ふ。吾人の信仰すべき道理あるもの、吾人の信仰すべき價值あるもの、これ眞の宗教信仰なり、雪を白しと見るは常識に於て合理なり、二と二と合すれば四となると信ずるも亦、常識に於て合理なり。合理的の認識、合理的の信仰は恐らく、科學哲學と雖も之を否定する能はざるべし、所以者何、科學哲學と雖も元來これ常識の進み

宗教の資格、合理的

宗教の資格、合理的

て茲に至り、一貫して科學となり、常識の研究、深奥して哲學となりしにあればなり。蓋し合理は智目なり、信仰は行足なり、物の辨、黑白の別を知るものは智目ならずや、物を運び、事を行ふ實踐躬行、これ行足ならずとせんや。智目行足は双輪兩翼の如し、二者其一を缺くも正路を歩する能はず、安全目的境に達する能はざるなり。智目如何に明なりと雖も、行足を無視せば一步も出づる能はず、無用の眼、無能の智にして終らんのみ、行足如何に健全なりとするも、智目を無視せば危険恐らく焉れより甚しきはなかるべし。

世の信仰界に實驗派と稱するものあり、科學哲學を嫌ふこと蛇蝎の如く、學術派と稱するもの亦彼等を以て愚妄なり、迷謬なりと嘲笑せるものあるを見ずや。吾人を以て之を觀れば、二者共に確に一利ありて亦確に一失あり、並びに未だ其片輪たるを免る能はざるなり。其信仰の至れるに及んでや、いづれの行もあよびがたき身な

れば、とても地獄は一定すみかぞかし』の大確立なくんばあらざるなり。然れどもこれは是れ、唯吾人の主觀的信仰の方面を示したるのみ、安心の方面を説きたるのみ。宗教の本質、信仰對象の合理なるや、不合理なるやは素より問はざるところの信仰なり、所謂る智目を以てひざるの行足なり。勿論宗教は宗教なり、科學にもあらず亦哲學にもあらずるべく、新古に超絶して學術の能く破壊し去るものにもあらずるべし。然れども宗教の信仰なるものは、必ずしも合理的に出でざるべからず。いかに新古に超絶せる宗教なればとて、又學術に制取せられざる宗教なればとて、不合理にても迷妄の痴態にても、謂はれなき信仰にても、唯信仰さへありたれば構ふ所にあらず、問ふ所にあらず、論ずる所にあらずとは斷じて言ひ能はざるなり。若しこれを爾か言ひ能ふものとすれば、凡そ宗教の信仰程、世に危険なるものはあらず。所以者何、吾人の乗托すべき信仰の對象

宗教の資格、合理的

其者が幸にして合理的のものならば、盲信却て是れ盲信ならずして正信とならん、一信仰裡に自ら信智の二徳を具備せるものとならん。然れども若し不幸にして、不合理のもの、迷妄のものならば如何がするぞ。いかに信仰を主要とすればとて、餘りに危険ならずや。吾人は信ず、吾人の信仰は種々の大難出來すとも智者に我義破られずば用ひじとなりとの智目行足圓滿して欠げざる合理的信仰の奥底に安住するの勝れるに如かざることを。

## 二、活動的の宗教なること

世に宗教を待つ所以、人に信仰を要する所以は何んぞや、是れ謂ふまでもなく、宗教其ものは濟世利民を以て其目的とし、主要とするにあればなり。蓋し宗教なるものは社會の上に活動し、家庭の上に活動し、個人の上に活動して、個人の改善となり、家庭の改善となり、

社會の改善とならざるべからず。若し夫れ宗教にして單に阿練若主義たり、山林主義たり、庵り主義たり、厭世主義たり、寂滅主義たり、消極主義たるもの而已とするものあらば、是れ則ち宗教を誤解したるものなり、是れ其教へ自らの目的と背馳するものなり。身、阿練若に入らざれば個人を向上せしめ得ざる乎、人、山林に交はりて家庭の和樂を迎へ得る乎、世、悉く庵り主義を取りて社會の改善を圖り得べき乎とは、世人の夙に問題とせる所ならずや。憶ひ起す、釋迦人天師、蹶然、伽耶城を去りて仙境に入りなき、然れども彼れは、阿練若を主義として終りし乎、彼れは山林を主義として終りし乎、彼れは山林より出て、大哉大悟せり、而して亦大に飛躍せり、彼れの化他赴物の大慈悲行は、一切の人天をして世尊と呼ばしめたり、人天師と渴仰せしめたり、彼れの如來行、如來事は、濟世利民の外に何ものをも存せざりき。彼れは世の慣闢に超絶せり、彼れ

は世の煩悶を解脱せり、彼れは更に還た、社會に出て、社會を改善せり、家庭に對しては家庭の和樂を與へ、人に對しては人の煩悶を抜き濟ひたりき、是れ彼れが人天師としての、化他利物の活動にあらずして何ぞや。

吾人は彼れの寂滅を唱へ、涅槃を證したるを知る。然れども彼れの寂滅を唱へ、涅槃を證する所以のものは、大に還た彼れが活動方面に出づる所以にして、世の所謂寂滅にあらず、灰身にあらず、厭世にはあらず、彼れの山林に交はりしは世の穩居主義と同じか、らず、彼れの仙境に入りしは世の厭世主義とは異なりぬ。博愛彼れが如く、慈悲彼れが如く、圓滿彼れが如く、勇猛彼れが如く、奮迅彼れが如くにして、彼れは、志望の多くを懷き、以て山林に接觸したり、而して山林に得る所ありき、仙境に接觸せば、仙境に得る所あり、洹河に接觸せば、洹河に得る所あり、彼れは山と河と原と里とを簡ばず

觸向對面、悉く彼れが研究場たらざるはなく、彼れが大學校ならざるはなし。斯くの如くにして始めて山林に入るも不可なかるべく、阿練若の境遇も不可なかるべし。然れども世の見解の多くは、單寂滅となり、單山林となり、單隱居となり、果て、終には無能となり、死物となり、冷淡となり、無愛となり、了りて、宗教の宗教たる根本の目的なるものを忘失するに至れるは、天下滔々皆是れなり。

吾人は常に之れを異しむ、佛教を奉ずるものに於てすら猶且、其教旨を目して、單寂滅、單消極のものなりと見解するもの多し。門外者の見解にして、其正鵠を失するものある、豈亦宜ならずとせんや、毎に自ら是の念を作す、何を以てか、衆生をして、無上道に入り、速かに佛身を成就することを得せしめむと、是れはこれ、彼れが單寂滅を打破したる、單山林を排斥したる、破天荒の一大活動を宣言したる、絶叫の聲なることを知らずや。這箇の要義を了得せざれば、未だ以

宗教の資格、活動的

宗教の資格、活動的  
て釋迦を評するの資格なしと謂ふの外なかるべし。

吾人は佛陀の本懐を活動主義なり、具體的改善主義也と信ずるものなり吾人の所信にして過誤なからしめば、佛教は決して現實界を無視するものにあらず、否、大に現實界に活動して現實界を濟ふものなり。之れを放てば社會の改善に見はれ、之れを中に置けば家庭の和樂となり、之れを卷けば退ひて個人の安心に隠くる。卷舒、大小、廣狹の自在と謂ふもの豈是れなるなからむや。若し夫れ佛教をして活動的の宗教にあらざらしめば如何、恐らく今後の社會に囑望する所なく、世に永く無用の長物たるに終らむのみ。遮莫佛教と何教とを問はず、宗教資格の一要素に數ふべきものは何ものなる乎を問はず、吾人は躊躇なく活動的の宗教ならざるべからずと答へむ而已。

### 三、道德的の宗教なること

宗教の世を濟ひ、人を利する所以のものは、宗教の一要素として道德的意義の存在せるものあればなり。然れども、世の所謂る道德なるものは、時代の變遷と俱に變遷せり、世運の推移と共に推移せり。曰く、野蠻時代の道德、半開時代の道德、文明時代の道德。曰く、西の道德、東の道德、社會の道德、土地の道德、習慣の道德。曰く………何んぞ夫れ世の道德の名の煩多なる斯の如くなるや。抑も道德なるものは時代と共に變遷するもの乎、智識と共に高下するもの乎、社會と共に進退し、習慣と共に出入し、東西の異別なると共に異別を生ずるものを道德と稱し得る乎。然り、變遷あり推移あるべし、然れども、變遷し又は推移する道德の如きは、名は則ち道德なりと雖も眞の道德たるを得ざるなり。是れ則ち部分の道德な

り、枝葉の道徳なり、肉の道徳なり、低き意味の道徳なり。之れを強ひて名けて假りに、野蠻時代の道徳、文明の道徳、西洋道徳、東洋道徳、土地の道徳等と稱するものにあらずや。凡そ人間にして萬物の頂に居り自ら其靈たるを任ずるものは何ぞや、是れ謂ふまでもなく、新古を問はず、東西に拘はらず、一貫し終始して人道なるものゝ存在すればなり。人道とは何ぞや、人道とは則ち人道なり、禽獸にあらず、餓鬼にあらず、修羅にあらずなるなり。修羅は鬪争に生活し、餓鬼は苦慾に生活し、禽獸は殘害に生活しつゝあるにあらずや。而して人間の生活は如何、人間の生活は則ち人道を歩むの生活なり、人道を歩むの生活は智徳行使の生活なり、智徳行使の生活は、智識を以て徳義を律し、徳義を以て智識の規する所を履み行くの生活なり。吾人は實に智徳行使の爲めに生れ、智徳行使の爲めに働き、智徳行使の爲めに棺を蓋ふものたり、人生の目的實に茲に存せりと謂ふべか

らずや。然れども今や世間の生活を觀よ、大に然らざるものあり、嗚呼、人生の目的は今日果して何處に埋没せるやを疑はしむるものは、是れ今の世の生活状態ならずや。瑞西の經濟學者シヌモンジ、絶叫して曰く「然らば問はん富は萬能にして人間は一文の價值なきか」又曰く「經濟學者は一にも曰く富、二にも曰く富と、其言や可し然れども抑も之れを何ものゝ爲めにせんと欲するか」と、是れ世の經濟學者の多くに於て見るところの宿弊を切言したるものと謂ふべし。學者にして猶この誤解に陥れるものあり、今の世の汝々たる俗物、人生の目的を忘れ去りて「眼中唯金」之れを過重視し、經濟の一方に狂奔し悶求して熄まざるに至る、豈亦宜ならずとせむや。故に曰く、人は人たるの道自ら存して不變的に人たるの道あり、眞に動かざるの人道あるべし。眞實の人道、不變の道徳にして、豈新古東西の別あらんや、豈文明野蠻の異を立つべけんや。



道徳の基礎や、道徳の根本や、皆須らく之を宗教の淵源に需むべし、道徳を需めて得ざるの宗教は、宗教にして宗教たるの資格なきものなり、天下多くの宗教あり、曰く、天然的宗教、曰く、動物的宗教等の多くの迷信的宗教あるにあらずや。天然的宗教は道徳的宗教とは背馳せり、動物的宗教は非道徳の崇拜なり、迷信的宗教は凡べて道徳を破るの信仰なり。孟子言はずや「悉く書を信せば書なきに若かず」と、蓋し是れ怪行俗書の世を害するの大なるを切言したるもの。今吾人をして更に言はしめよ、曰く、悉く宗教の名あるものを信せば宗教なきに若かずと、是れ吾人が妖教迷信の世を荼毒するの甚だしきを憂えてなり。偶論者あり、佛教を評して曰く、佛教は非道徳にあらず、無道徳なりと、其意蓋し佛教は出家主義なり、山林主義なり、寂滅主義なり、消極主義なりとして、是にも非にも佛教に於ては道徳の意義なしと言ふにあるものゝ如し、是れ世自己の淺見と表

白せるものにあらずや。佛教に於ては枝末善あり、根本善あり、相對の道徳あり、絶對の道徳あるを知らざるべからず。而して道徳の最上、最上の最上乘なる究竟道に名けて、絶對善若しくは、絶對道徳と謂ふ。彼の西洋道徳、東洋道徳、若しくは半開の道徳、文明の道徳と言ふが如き變遷推移ある道徳の如きは、皆是れ佛教の所謂相對道徳中の一部分の道徳たるに過ぎず。低き意味の道徳たるに過ぎざるなり。時處の如何に係ることなく、人道は人道として不變色的に存在するものあり、之れを佛教の所謂相對道徳の本位と言ふ、而して是の相對道徳の本位は即ち、絶對道徳の域に進行せんとする好關門となり、向上律の線路となるものなり。この關門と線路は、吾人人間の必ず通ずべきもの、重んずべきものたるを佛陀は吾人に教諭したりしなり、案内の勞を吝かにせざりしなり。戒法門鈔に「此五戒(殺生偷盜邪淫妄語飲酒)若し破れれば一切の諸戒皆破る、五戒は

破ると雖も大乘戒は持ちたりと云ふことはこれなし」と是れ則ち吾人が人間として人道を歩み行く上に於て、實に欠くべからざる教訓ならずや。歎異抄に「信心の行者には罪惡も業報を感ずること能はず諸善も及ぶことなし」と誠に然り、然れども是れ絶對の域に優遊するの言なり、吾人が人間として相對の範圍に屈伸し、進退せざるを得ざる間は、人間の本位、相對上の人道を輕んじて直に、絶對道に超越して跨ることを得ず。若し夫れ吾人が人間として現實界に處するに當り、人間當位の道徳を無視して、徒らに高きものを面已挺らへんとするが如きは、道徳的宗教の與みせざるところなり。斯くの如き空腹高心の聲は、單り人道の罪人のみならず、抑も亦絶對道の罪人なり。惟ふに宗教として世間に對するの立脚は、道徳的宗教にあらずんば其存在を永久に認むる能はず、否、存在するの必要なきなり、否、一日も早く其滅亡の速かならむを望むものなり。吾

人は信ず、宗教の資格中、其要素の一として攝取せば則ち道徳の要素是れなりと、是れ其道徳的宗教を撰擇せざるを得ずと絶叫する所以也。

#### 四、國家的の宗教なること

國家の成敗興亡は權者の頭腦に藏する乎、兵馬恣愆の產物なる乎、武裝の巧拙に依れる乎。然り、國家の進歩は犠牲史の發達なり、國家の屈信は干戈的政治史の尺蠖なり、然れども是れ唯一面の見のみ、皮想の見のみ、之れが醱酵し出づる以前、迸發し來る以前に於て業に已に、其國民の腦庫に醸造し、養生し、胚胎せし何ものかの思想が悍然として誘致し又實行に訴へたる結果ならずんばあらざるなり。されば思想は根本なり、干戈は枝末なり、精神は主なり、兵馬は從なりと謂ふべし。マホメッドの號令を見よ、コーラン乎、年貢乎、將た

剣乎」と、彼れは秋霜烈日の如き精神を以て基督教國民に當りしなり、當時基督教國は、柔儒風を爲し、腐敗俗を爲したるなり、争てか敢て烈勇憤の精神に鼓舞せられたる國民に對抗し得んや、彼れマホメツドの劍は其空隙を衝き、焉然として基督教國へ闖入せり、この時に當りては最早、サラセン、民族が鐵と血とを以て宣傳したる「世界唯一神」の呼聲の如きは、殆んど空谷の甕音に等しき觀を呈せりしと云ふ、亦以て思想宣傳力の如何に速かにして且強大なるかを知らるに足るべし。今や國家問題は、吾人の重要問題として注意を怠るべからざるものとはなりぬ、然れども吾人の見る所を以てすれば従來宗教家は兎角に、國家問題を甚だ輕視するの傾向あり、豈に警誡すべきの事ならずとせんや。抑も國家を覆へし、社稷を危ふするものは何ぞや、曰く、武器にあらず、山河にあらず、亦氣候にもあらず、吾人は國家を危險路に誘ふも

のは、國家觀に於ける根本的思想の嚮導者是れなりと言はん、と欲するものなり。この人心思想を感化し、又之れを宣傳するものは何もの乎、曰く、宗教是れなりとす。若し夫れ國家觀に於て危險なる思想を發生し、宣傳する宗教ありとすれば、忽ち危險なる其思想は國中に瀰蔓し、國民の精神に浸染して、國家の危きこと、恰も斷崖絶壁に立つが如けん、神に背ける國家は滅亡するも可なり」との思想、國民の精神に入り、更に之れを誤解して露探となり、豈國奴となる、國家たるもの、豈戰慄して以て牖戸に綱繆せざるべけんや。見よ、世に社會平等主義を唱ふるものあり、個人爲本主義を唱ふるものあるを、前者は國家觀に於て、餘りに國家を淺小に視たりしなり、國家は唯人力の上に立ちたる政權の約束作用のみとせり、後者も亦國家を甚だ輕きものに視たりしなり、國家は唯山川水陸の形勢に依りて分立したるもの而已と言ひ、自己を利する爲なれば國家の如き

宗教の資格 國家的

は移住するも可なりとせり。一は宗教家中に非常に勢力ある議論にして、他は利己連に歡迎せらるゝ議論なり。斯くの如きの主義思想は、我日本帝國と全然相容れざるものなり、我建國の大本は、國家主義の醇乎として醇なるものなり、日本の國體は、絶對的國家主義に立脚したるものなり。國家の成立後に出でたる我日本臣民、特種の國體の下に生存せる國民は、一齋に赤誠を全傾し以て愛國旗を捧げざるを得ず、國家の自衛に集らざるを得ざるものなり。

佛教は平等の方面より見れば普遍性のもなり、平等の理、平等の益、甲乙の差なく上下の別なし。然り、全く普遍性なり、然れども、其普遍性の中に於て自ら差別門を開けり。而して甲乙の國家となり、君臣となり、貴賤となり、主従の序となるに至りぬ。既に君臣あるが故に君臣の分あるを説き、國家あるが故に國家の秩序を教へぬ。臣は以て君に忠たるべく、民は以て王に順なるべく、君は以て臣を愛す

べく、王は以て民を治むべきの道を説きたるなり。斯の道理に依りて、甲の國家に臣民たるの因縁を有せば以て甲の國家に殉すべく、乙の國家に生存する因縁を有せば以て乙の國家と共に進退すべく、權兵衛の子と生るれば權兵衛に孝行を爲すべく、太郎兵衛の子と生るれば其恩を太郎兵衛に報すべきの謂はれ、因縁約束を守るべきの道を説きたるものは是れ、佛教ならずや。然るに佛教家中、多く、平等慈悲の一面に而已立籠りて差別門を開かざるが故に、差別門に立てる國家を輕視せざるを得ざるに至るは自然の勢ひなり。誤解する勿れ、佛教に於ける鉢道と用道との關係連鎖なるものを、其鉢道よりして之れを見れば平等慈悲なるべく、差別偏頗の見なかるべし。然れども其用道に至りては則ち然らず、善惡の差あるべく、是非の別あるべし、善は以て稱揚すべく、惡は以て厲懲すべし、是れ其暴横なる露國を征すべく、戦争をも避けざる所以なり。暴横

宗教の資格 國家的

宗教の資格、國家的

彼れにあるが故に、正義は彼れに與みせず、正義我れにあるが故に、正義は我れに與みず、斯の義、斯の道には、天も與みし、地も與みし、聖も與みし、賢も與みし、國も與みし、人も與みするなり。正義の存するところ、天祐あり、光明あり、而して慈悲は汝の傍にあり。是れ界々互具の根據ある最上の神秘なり、豈唯平等裡に固着して、國家と國家との生存問題を忘れ去るの愚を學ぶべけんや。

吾人は吾人を愛する爲めにも猶我國家を愛せざるべからず、世界の平和を維持せん爲めにも猶我國家を愛せざるべからず、國家は吾人に國民として愛を送くるのみならず、世界にも亦愛を送くるものなり。個人にも亦生存を與ふるものなり。故に曰く、國家の生存は吾人の生存を意味し、國家の確立は世界平和の確保を意味すと。國家哉、國家哉。惜問す、日本宗教家中『守護國家論』の著者は誰ぞ、立正安國論』の主張者は何人なる乎と。吾人は國家の生存と共に生存し

國歩の艱難と共に艱難し以て、明確なる國家的宗教を撰擇して國家思想の宣傳に供せんことを希ふもの也。

我れ日本の柱とならん、

我れ日本の眼目とならん、

我れ日本の大船とならん。

(日 蓮)

宗教の資格、國家的

### 五、統一的の宗教なること

感化の力、結合の力、誘致の力、宗教之れを併有せり、晦澁の弊、固陋の弊、亂離の弊、亦以て宗教にあり。人心の化せられて動くや、鬼神をして泣かしめ、精神の凝りて、結ぶや、巖石も猶及ばざるものあり、豈惟はざるべけんや。世間宗教を道ふものに、自由主義あり、教權主義あり、理性主義あり、神秘主義あり、倫理主義あり、超倫理主義あり、壓迫主義、實驗主義、現世主義、未來主義と言ふが如きもの是れあるにあらずや。彼の自由主義を取るものは、教權派を迂愚なりと嘲けり、教權主義は自由派を目して輕薄浮薄、宗教の神聖を知らずと叫べり、理性主義は神秘派を笑て幻術なり、荒誕不稽信ずるに足らずとせり、神秘主義は理性派を下だして其着眼猶低しと斥けり、倫理主義は超倫理派を無道德なり無道德の宗教は人生には無用なりと論

じ超倫理主義は倫理派を卑しめて宗教たるの價値なしと排し、壓迫主義は實驗派を猶迂遠なりと論じ、實驗主義は壓迫派を擧笑して安心の趣味を知らしむ能はずと駁し、現世主義は未來派を厭世的死物宗教と蔑し、未來主義は現世派を宗教としての根底淺く取るに足らずと論じ、主義と主義とは常に相衝突しつゝあるを見ずや。斯くの如く衝突して相容れざる所以のものは畢竟、各其一端を固執して其眼光の全局に達せず、隻眼の見效に至りしものと謂はざるを得ず。斯くの如きは單り後世の解釋其者が然らしめたるのみならず、地體教理其もの、立脚が分烈的、部分的のものたるに職由せりしにはあらざる歟。今試に吾人をして統一的の教理に徹せしめよ、彼れに於ては大に全幅的のものあるを發見するに難からず。彼の「この世は假りの世、善かれ悪かれ惜しむに足らず」と輕んじて現實界を捨つるが如き「雨降らば降れ、風吹かば吹け」と人生を無

宗教の資格、統一論

視するが如き、厭世的未來の一方面に偏するものにあらず。さりとて又「人生に於ける慈善は二十世紀の宗教なり」と、唯現實界にのみ力を與ふるを宗教の本色として、未來の實在さへも信せざるが如き現世の一方にのみ固執するものにもあらず。開顯的統一主義は則ち「現安後善」の理義を明らかにし「世間之樂及涅槃樂」の兩義を融會し「先づ生前を安んじて更に没後を扶けん」との兩面を調和し、包有して立てるものなることを知り得べけん。又壓迫と實驗との衝突を見よ、而して又其融會せるものを見よ。キリストが「平和を廣めん爲めに吾れ生れたるにあらず、子をして父に離れしめ、妻をして夫に別れしめんが爲めに、吾れは此の福音を持來せり」と、秋霜の如き嚴烈なるこの精神は、嚴烈は即ち嚴烈なりと雖も、彼れの嚴烈は彼れの大きな愛より生じたる嚴烈なり、亦壓迫なり「法華經流布の圖に生れながら、此經を信ぜざるものは、假令山間避匿にありて此

經を聞かず知らざるものも皆等しく不信謗法の罪過なり」と、斯くの如きも同じく嚴烈なり、甚だしき壓迫なり。然れども其壓迫の出づる淵源は慈悲の涙眼より進出せるを知らずや「信仰は自らの實驗にあらざれば活力なし」と言へる實驗派と其根底、何んの差異ある乎、到底調和せざる乎。然り、壓迫と實驗、其何れの方面よりするも結局、活信仰に入るを以て化導の最要とせざるを得ず。守護國家論に涅槃經を引きて言へるものあるを見る「若し凡庶の者には當に威勢を以て之に逼つて讀ましむべし、若し僑慢の者あらば我れ當に其が爲めに僕使と作りて其意に隨順し其れをして歡喜せしめ然して後ち當に大涅槃を以て之れを教導すべし、若し大乘經を誹謗するものあらば當に勢力を以て之れを擯きて伏せしむべし、既に伏し已りて然る後ち勸めて大涅槃を讀ましめん、若し大乘經を愛樂する者あらば我躬當に往て恭敬し供養し尊重し讚歎すべし」

と示すものは、是れ時に壓迫主義を取りて多大の効用あり、時に實驗主義を用ひて多大の化益ある所以也。斯くの如きは畢竟これ化導上の應用に就て且らく其方面を異にせざるを得ざるに出づる而已。所謂「四悉檀を心に懸け」或は「不可一向」と言ふもの恐らく此等の意義を解せよと言ふに外ならざる也。其外、倫理主義と超倫理主義とを接合しては「治生の語言、資生の業等は皆正法に順ず」と、融會の道を開き「天晴れぬれば地明かなり」の意義を開顯して、絶對二方面の接合を遂げたるものゝ如き。又彼の理性主義と、神秘主義との調和を論じては「一念三千を立てずんば性惡の義これなし、性惡の義これなくんば佛菩薩の普現色身、不動愛染等の降伏の形、十界の曼荼羅三十七尊は本無今有の外道の法に同じき歎」と論じて、根底ある神秘、高き神秘を以て常識の理性と、常識以上の理性とを共に、接合融會したるが如き。又彼の自由主義と教權主義とを調和し

たるもの「教觀不離」の融會論に見るところあれ、所謂其教相と稱するものは即ち佛陀の教權なり、この教權なるものが教部に顯はれたるところを名けて教相と謂ひ、又其教部を吾人の思想に移して活動せしむるところを名けて觀心と謂ふなり。吾人の思想の上に移りたる時は且らく、教相を離れたるが如く見ゆるも、其教と觀との根底に於ては須臾も相離れざるなり。然らば自由討究と言ひ、教權主義と稱すと雖も、二者共に最後の歸趣は「不離」の目的に在りて毫も衝突を存するものにあらずと言ふ。この兩端の衝突點を調和して圓滿ならしむる能力を有し、死活の大權を有するものは統一的宗教なり。統一教理は宗教中の宗教王たるなり、故に吾人は統一的宗教を撰ばんとす、分烈的宗教は吾人の歡迎せざる所なり、分烈を歡迎せざるは人心を分烈せしむる恐れあればなり、人心分烈すれば、國家も分烈し、世界亦分烈す「億兆心を一にして」との詔勅は

集賢の實錄、卷二、四



何に依りて鞠躬奉仕せんとはするぞ、これ吾人の焦慮せざるを得ざる所以也。

吾人が宗教の大要素として統一的を推す所以のものは主として諸多の主義を統一し、分烈を總統するにあり。諸多の主義を統一するは人心を統一するにあり、人心を統一するは國家を統一するにあり、進んで亦世界を統一するにあればなり。人ありて言へらく、宗教は元來個人の安慰にして得らるれば足る、安慰にして得らるれば『鬪の頭、狐の尾』可なりと。然らず、宗教たるもの個人の安心に必要なるは素より論なし、然れども其個人の安心が、唯個人に止まりて夫れより以外、一步も出てざる乎、活動せざる乎、向上せざる乎、否、個人の安心果して誤りなくば、正鵠を失はざれば、必ず發して家庭に活動すべく、國家に活動すべし、家庭に活動しては和樂となり、國樂となるべく、國家に活動しては愛國となり、義人となるべし。是に於

て乎、宗教自かちが人生觀に對しても一定し、國家觀に對しても統一せざるを得ざるの必要を感ずるにいたる。若し夫れ其必要なしと謂は、宗教は個人以外に、何等貢獻するところの能力なきものと謂はざるを得ず、宗教なるもの豈然かく無能力なるものならんや。吾人は宗教の個人を感化し、家庭を感化し、社會を感化し、國家を感化するものたるを信ずるものなり。故に曰く吾人は國民としては猶更に、國家に貢獻すべく、思想を統一すべく、統一的宗教を撰ばざるを得ずと主張する所以、實に茲にありて存する也。



十方佛土中  
無二亦無三  
但以假名字  
說佛智慧故  
唯此一事實

唯有一乘法  
除佛方便說  
引導於衆生  
諸佛出於世  
餘二則非真  
(法華經)



宗教の資格、統一論

## 七、本尊と信仰

### 一、宗教に於ける本尊の位地

本尊は信仰の最向上境なり、宗教の腦髓なり、而して宗教は本尊と信仰との活現なり、或と應との活ける交通なり、豈これより以外に宗教あらんや。若し夫れこれより以外に宗教ありと云はゞ、其は誤謬なり、宗教の名の下に宗教たるを得ざるのみならず、宗教の實に於て宗教たるを得ざるなり。彼の法と謂ひ、道と謂ひ、理性と謂ひ、真如と謂ひ、大自觀と謂ひ、神と謂ひ、佛と謂ふもの皆是れ、吾人信仰の向上境ならずや、吾人信仰の對象にあらずや。

凡そ宗教を唱ふるもの其本尊の性質種類こそ千差萬別なれ、一として吾人信仰の對境たる本尊のなきものはなし。見よ世の宗教學者は各其見るところに因りて宗教を分類し、且之れを評價せしも

のあるを。曰く或は言語を基礎として宗教を分類せるもの、或は眞偽を基礎として、宗教を分類せるもの、或は天啓の有無を基礎として、或は偶像の有無を基礎として、或は崇拜物即ち神の數を基礎として、或は信仰國土の廣狹を基礎として、或は創立者の有無を基礎として、或は本尊即ち信仰對象の性質を基礎として宗教を分類せるものあり。然れども此等の宗教分類法は、部分的分類、不公平の分類、偏狹の分類なり。今茲に列記せる七個の分類法は、甚だ不完全なる分類にして、世の宗教を悉く網羅し能はざるものなり、獨り第八の本尊を基礎として宗教の性質を知り得るの分類法のみ完全に於て、吾人の信頼するに足れるものなりと謂ふべし。勿論、宗教の優劣價值を知るに於ては、本尊の性質を知るに若くはなかるべく、本尊の性質を知り得て始めて始めて、其宗教の性質をも知り得るにあらずや。故にこの本尊を基礎として宗教の性質を分類し、評價する所の

宗教に於ける本尊の地位

分類法は、前七個の分類法に比較するに、優に一頭地を抜きたるものなり、包含的なり、本領的なり、條理的なり、本尊の性質を以て其宗教の性質を分類し、上下することは宗教として當然の理なり、吾人は斯の分類法に與みせざるを得ず。

『宗教研究』(岸本能武太氏著)に言へるあり、曰く。

本尊の性質を基礎となす此の第八の宗教分類法は、本尊の性質中殊に道義的分子に重きを置くものなり。即ち道義的分子の有無を基礎として、世界凡べての宗教を二種に大別せんとするものなり。道義的分子を有せざるか、若しくは此の分子の極めて發達し居らざる宗教を、自然的宗教と稱し、道義的分子の發達せる宗教を道義的宗教と稱す。故に茲に自然的宗教と云ふは、前に第三の分類法に於て云へるとは大に異なる處あり。前に云へる自然的宗教

は超自然教即ち天啓教に對して云へるものなるが、茲に所謂自然的宗教とは單に道義的宗教に對して云へるにて、道義に縁なき宗教と云へるに異ならず。されば此の第八の分類法を採る人々は必ずしも自然教の外に殊別なる天啓教なるもの、存在を信ずるを要せざるなり。世界凡ての宗教を斯く自然的道義的の二種に大別するとして考ふれば、自然的宗教は重もに社會の幼稚なる時代、則ち人々が未だ道德の重んずべきを悟らず、從つて其崇拜する本尊に道德の存在を必要とせざる時代に行はるゝ宗教なり。之れに反し道義的宗教は、社會の發達して人々の道義の重んずべきを覺り、從つて其の崇拜する神を以て道義的性質を有するものなりと認むるに至れる時代の宗教なり。

宗教に於ける本尊の地位

宗教に於ける本尊の地位

斯くの如くなれば自然的宗教は劣等なる宗教にして、道義的宗教は自ら優等なる宗教ならざるを得ず。元來人は己れの崇拜する本尊を自ら造り出すものなれば、たとへ開闢の前には上帝が人間を造りたりとするも、歴史の上より云へば、少くとも本尊は人間が造り出せるものなるに相違なし。故に或意味に於ては、吾人は人が神に肖るか如く、神も亦人に肖るものなりと云ふを得べし。されば一方より見れば吾人は本尊の性質を研究して、其の時代の社會的又道義的思想の發達如何を推測し得べく、又他の一方より見れば、吾人は一國一地方に於ける智識又道徳の發達如何を研究して、其の社會に崇拜せらるゝ本尊の性質如何を測量し得べきなり。

本尊の宗教に於ける位地實に重大なり、本尊は其宗教の頭腦なり、

其宗教の性質を知らんと欲せば、本尊の性質を知り得るに若くはなく、本尊の性質を知り得れば、其宗教の性質自ら明かなり。若し火を以て本尊とし、水を以て本尊とし、風雷雨電を本尊とせる天然物崇拜のものならば、謂ふ迄もなく其宗教の性質甚だ劣等なり。若し又狐を本尊とし、猫を神とし、蛇類を本尊とし、或は生殖器を本尊とするが如き宗教の性質ならば亦以て其野蠻たるを免かるを得ず。本尊若し正しき條理あり、宗教の本領を有するものならば其宗教の性質は高等なり、吾人の信頼するに足るべき價值あるべきもの也。

本尊は實に宗教信仰上、一日も欠くべからざる重要なものたるなり、然れども吾人は不幸にして、佛教家中誤つて大に本尊を輕視する傾向あるものを見る、豈誠めざるべけんや。去れば彼の獨乙の碩學ハルトマンは、佛耶兩教を對比して曰く「佛教は基礎より造らん

宗教に於ける本尊の地位

宗教に於ける本尊の地位

として未だ屋根に及ばざるもの、耶蘇教は先づ屋根より造りて基礎の堅からざるものなり」と、彼れの屋根とは宗教の客體たる本尊を指したるなり、其基礎とは宗教の主體たる吾人の本體を指したるなるべし。蓋し耶蘇教は神の方面に關しての講明説論極めて發達せるも吾人々類の本體を解釋すること甚だ幼稚なるを誠め、又佛教に對しては吾人の本體を解釋する講明説論、巧妙を極め殆んど遺憾とする所なしと雖も、宗教の根本義たる本尊の説明、頗る淺薄粗漏なるものなりと嘲けりたるものにはあらざる乎。

元來古より佛學者の多くは、唯理法の偏圓優劣の排列にのみ努めて、宗教をして極めて乾燥無味的に了らしめたり。宗教の活ける生命、信仰の活ける交通機關、吾人の活ける感應主たる本尊の本體、本尊の性質の如きは殆んど措て問はざるの傾向に陥り、這箇の研究を欠き、臆意を茲に致さざりしは實に古今佛學者の一大失態たる

ずんばあらず。是れ佛教が世界の大宗教たるにも係らず猶未だ世界に強大なる勢力を現はすこと能はざる所以也。

今吾人をして少しく佛教の流傳史を語らしめよ。抑も佛教は戒定惠の三學を以て骨子とせり、之れに依りて現身に人間以上の證果を得んことを努めたり(或は羅漢として、或は菩薩として、或は佛陀として)則ち苦悶ある人間をして人間の苦悶を解脱せしむべく、戒定惠を以て修證の行法と爲したるなり。後ち漸く理は愈理に奔り、空は愈空に陥り、其戒律の如きに至りても全く世人の道義と相離れ、絶對又絶對、愈高く、愈遠く、常識の人間としては到底實行し能はざる至難の戒律を立つるに至り。其禪定の如きも人間としての六識の作用を忘却せしめ、普通の感覺をも殺さしめんとして、殆んど認識をも非認するが如き極端に馳するに至り。其智慧の如きも吾人人間をして、絶對界、不可思議境を、現身に識得せしめんとして、高

宗教に於ける本尊の地位

宗教に於ける本尊の位地

さより高きに登り、遠さより遠きに奔りて、其極遂に宗教の客躰即ち本尊の必要を認むるの餘地なきに到らしめたり。かくて彼れ等は宗教主躰の方面にのみ發展するを努め、自己の見性をのみ宗教の本旨と定むるに到る、是れ彼れ等が本尊を輕視する根本誤謬を構成するに至りし所由あらずや。よし客躰の本尊を設くるものありとするも僅に自己が定惠を促進せしむるの方便に供するに過ぎざるなり。

斯くの如く佛教は長き歷程を辿りて、主躰の一面にのみ發展して、定惠の求むる所の理法の一面にのみ傾了したるが爲め、佛教の本義そのもの、佛教の本質其のものは、宗教の客躰たる本尊なるものを格段重き位地に置きたるものならずとの誤謬の觀を呈するに至りぬ。佛教學に於て佛教修行の方法に二大別あるを見よ、曰く智惠行、曰く信念行是れなりとす。彼れ智惠行より進まむとするもの

は、その智惠の要求たる理法なるものを第一要件に置きたり。彼れ等は則ち本尊の威應の如きは、之れを第二位に置きて僅かに正修の行法たる觀智の助縁と爲したるに過ぎず。則ち天台の四種(圓止觀、觀衆、遮那衆、遠塵付法)、三昧の本尊の如き、真言の四種(大曼茶羅、三昧耶曼茶羅、法曼茶羅、胎藏曼茶羅)、曼茶羅の如きは、其本尊に於て四種各別なる形式を呈せり、此等の本尊は皆以て假設的に之れを立つるに過ぎざるもの、如し。

然れども信念行に依りて安心立命を得んと欲するものは、必ず其信念の對境たる本尊を確立して、終始之れに依りて威應を蒙むるものたるを信じ、信念の把住を一に此の本尊に求むるにあり。故に信念行を以て宗旨とするものに於ては、信念の對境たる本尊の確立は、實に是れ最重最要の問題と見ざるを得ざるなり。然るに吾人の大に異しむべきは、其信念行を以て宗旨と爲すことを標示せる宗門にして猶且、本尊を輕視し、本尊を加除し本尊を雜亂し、之れに

宗教に於ける本尊の位地

宗御に於ける本尊の位地

附するに曲解回護の説を以てし、其誤れるものに至りては、主跡上の説明を混用し來りて其苦辨に資し、尙ほ甚しきものに至りては觀念家の用語を借引し來りて之れを横計する等本尊の本尊たる重要な位地、果して何れにあるやを忘却し去れるもの比々皆然るにあらずや。

嗚呼、風暴れ、海荒み、人騒ぐして暗黒久しきに  
翻るも、燈臺上花咲く間は、尙ほ微笑高叶の場  
所あり。(スザン、サウリヤ)

## 二、宗教に於ける信仰の位地

信仰は宗教に入る秘要の鍵鑰なり、信仰は本尊と交通する唯一の  
エリキなり、信仰は人生苦悶の産物なり、信仰は本尊の指導を行ふ  
ものなり。若し夫れ斯の信仰なくむば法あるも、道あるも、理性ある  
も大自觀あるも、神あるも、佛あるも、何の施すところかある。信仰の  
重要なる豈偶然ならむや、是に於て乎、自力主義は以て主觀的に信  
仰を辿り、他力主義は以て客觀的に信仰を取れり。前者は理性的信  
仰なり、後者は報恩的信仰なり、一は智的信仰なり、他は絶對信仰な  
り。其自力主義の強義なるものに至りては、始んど客觀的に信仰の  
對象を求むるの必要なしとまで主張せり。彼れ等は其信仰の對象  
たる本尊の如きものは「鯛の頭も信心から」てふ主義を歓迎せり、彼  
れ等は以爲らく、自家の信念にして確立せば、本尊の如きは有るも

宗教に於ける信仰の位地

宗に於ける信仰の地位

可なり無きも可なり、鱗の頭可なり、鱗の尾可なり、至竟本尊の如きは唯信仰喚起の一方便たるに過ぎずと。而して他力主義は如何、彼れ等は本尊に對しては一切自己の凡夫心を排し、一意純信を神若くは佛に捧ぐるの切要なるを説けり、他力の信心は善惡の凡夫、共に佛のかたより給はる信心なるが故に」と、純粹の信仰心は凡夫心より自發したるにはあらず、佛陀心なり、佛陀の賜はる信心なりと、絶對信仰の主張を持する斯くの如き強硬説さへあるにあらずや。『天の父は其日を善者にも惡者にも照らし、雨を義者にも不義者にも降らせ給へり』と彼れも亦同じく絶對信仰に入りて神の恩恵を謝するものにあらずや。

至れるものなりと謂はずんばあるべからず。信仰は如何に、主體の方面より生ずるものと云へる自力家と雖も既に宗教の下に立ち一の教旨に隨ひて行動すべきものたる以上は、自力と云ふと雖も、其自力と云へるものは抑も何ものに依りて得たりと思へる乎、是れ亦謂ふ迄もなく何ものかの客體の力、則ち他力に信頼する所ありて主體の信仰力を發動せしめたるにあらずや。例へば茲に人あり、岸下に落ちて救ひを求む、救者岸上より繩を下げて、之れに取り繩がれと叫ぶ、落下の人、手を出して其繩に取り繩り、堅く握りて、容易に岸上に救はるゝことを得たりと謂ふが如し。自己の手を出して繩に繩り堅く握るは、固より是れ我れの力にして則ち自力なるべし。然れども我れの手の外に、我れの繩の外に、我れの堅く握る力の外に、果して一物もなき乎、否、我れの外に岸上の救者あり、手の外に繩あり、繩其ものは我れより他

宗に於ける信仰の地位



宗教に於ける信仰の地位

に存在せる客體ならずや、岸上の救者も亦自己より他なる力者に  
あらずや。彼の苦行に依り、修禪を専らにして觀智を修するもの、  
如きは、自力は則ち自力なりと雖も、行者をして苦行せしめんとす  
るの力、修禪せしめんとするの力、觀智を修せしめんとするの力は、  
何ものに依りて生ずる乎、又其苦行修禪に依りて自己に獲得せん  
とする證果其ものゝ力なるものは、抑も何もの乎、吾人は強ち人格  
的の神なり、佛なりと而已謂はざるも、吾人の能力以上に存在せる  
偉大なる絶對力、能く吾人を薰化したるものなりと謂はざるを得  
ず。元來宗教としては絶對自力を漫稱するを得ず、僅に比較的に於  
て自力門を開する而已、既に一の教えの下に立てる者にして、奚ん  
ぞ絶對に自力を主張することを得んや。

之れと同時に信仰は、吾人凡夫心よりは決して自發するものなら  
ず、客體の加被力、能く吾人を誘導して吾人の信念を生起せしむる

ものなりと謂へる、絶對他力家と雖も、吾人主體の方面則ち自力信  
を餘りに過蔑して、悉くこれを無視せんとするは亦誤れるものな  
りと謂ふべく、罪惡多き衆生の方面を抑へて、救者即ち本尊の方面  
を揚ぐるは大に佳しとする所なれども、吾人主體より發出する自  
威自信をも悉く無視せんとするは、甚だ過當なる説論なりと謂は  
ざるを得ず。借問す、吾人の主體には毫も信念の發起すべき本體は  
なき乎、感動の起るべき本質は無き乎、否、吾人には本來信念發動の  
本質を有せり、而して其能力をも具へたり。其能力我れに備へ、本質  
我れに有るが故に、之れを開らかしむれば表はれ、之れを誘はゞ出  
て來たる經に「欲令衆生開佛知見」と、宜なる哉、發動すべき先天的能  
力、我れに具有せるが故に「開く」とは謂ふなるべし、衆生佛知見なく  
んば何ぞ開を論ぜん」と、是れ實に這箇の消息を解し得て餘りなき  
語にあらずや。

宗教に於ける信仰の位地

是れに由りて之れを惟ふに、彼の能く開くものは吾人の外にあり、開かるゝ本質は吾人にあり、指導は彼れにあり、發して動くものは我れにあり、慈悲は客躰にあり、隨喜は主躰にあり、主躰は自力なり、客躰は他力なり。例へば救者は彼の岸上にあるも被救の手は岸下の我れにあり、繩は我が前に來ると雖も、繩がる心は我れにあるが如し。然り、自他の二力併存して須臾も分立すべからず、分立せば則ち二力共に其功を失ふ、其功あらずんば感應何に依りてか生ずるを得ん。救はるゝ罪惡煩悶は彼の教主の恩澤に懺謝するところ無くひばあらずと雖も、我れは救はるべし、我れは救はれむことを願ふてふ其心は内的我れより發したる我れの心たらずんばあらざるなり、勿論、外的誘導の力與りて多しとするも、自力を吾人より悉く奪ひ去りて一に、他力に委するは正鵠を失せる信仰なりと斷ぜざるを得ざるなり。我れの心情より生じたるもの、我れの理性より

發したるものは、是れ我れの願ひなり、我れの方なり、則ち是れ所謂の自力なるものにあらずや。若しこの我れの心情、我れの理性、我れの自力をも併せ捉へて、猶他力の範圍に置くべきものなりと云はゞ、恐らく世には自力てふものはなかるべく、我れと謂ふものなきに至らん。警誡せよ、極端は凡べて中心を失ふの恐れあるを記慮せよ。『過不及』は共に識者の與みせざるところなるを。吾人は他力家の自力を無視するを極端なりと論ずると共に、自家の本尊を無視するをも亦賊めざるべからずと謂ふものなり。本尊あり、信仰あり、能救あり、所救あり、感あり、應あり、自他の二力、活ける交通ありて始めて、宗教的活動を生ずるに至るものなり。豈これより外に宗教なるものあらんや。信仰の宗教に於ける位地、夫れ斯くの如く重要にして、且偏廢すべからざること斯くの如く亦重要也。

宗教に於ける信仰の位地

### 三、現代に於ける相承論の價值

宗教に於て、本尊と信仰とが其重要な位地を占め得たる、萬代を替ゆるも猶變ぜざるものあり。然り、本尊の重要な位地、信仰の重要な位地、畧ぼ前項に於て之れを論陳したりたりき。

然れども、宗教に於ては古來十中の八九、本尊論に於ても亦信仰論に於ても、各相承の道ありと謂ひ、相傳の法ありと稱しぬ。彼れ等は皆思へり、相承なきものは其道を傳へ得ず、相傳なきものは其法の興味を咀嚼する能はず、一器の水を一器に移し、移傳又移傳、展傳して相紹ぐ、茲に於て乎、道統の傳依りて生じ、依りて存すと。斯くの如きの信仰思想は、單り之れを佛教に見るのみならず、儒教にも道統の傳を唱へ、耶教にも傳承の說を唱ふるものあるを見る。今吾人をして少しく之れを語らしめよ、彼の孔子が所謂る其道と

稱するものは、孔子自身の創見にあらず又孔子の獨悟にあらず、先聖後聖相傳へて茲に至ると云ふ、堯は是れを以て之を舜に傳へ、舜は是れを以て之を禹に傳へ、禹は是れを以て之を湯に傳へ、湯は是れを以て之を文武周公に傳へ、文武周公は之を孔子に傳へ、孔子は之を孟軻に傳ふ、軻死して其傳を得ず、荀と揚とは擇んで精しからず、語つて詳かならずと、嫡々之れを祖述し、道統の傳を失はざるを示しぬ。

又轉じて之れを耶教に徴し見よ、彼のウキッテンベルヒの寺門に九十五箇條の『告知文』を貼出して宗門改革の運動を開始したるマルチン、ルーテル、彼れは如何なる事に依りて起ちし乎を。彼れの運動は羅馬教會の腐敗墮落、其極に達したるの時なりき、人心に安慰を與ふる宗教は却て、人心に怖畏を與へたるの時なりき、古學を復古して教權傳説の弊を打破せんとせし時なりき、希臘文學の輸入

は、歐羅巴の人心に一新生面の發見を興へたりし時なりき、希臘哲學の研究は以て、基督教の神聖を瀆すものなりと忌みたるの時なりき、科學的智識の進歩は以て、基督教の根底たる奇蹟に向つて満足なる立證を要求し彼の教會を苦しめたるの時なりき。而して時人叫んで曰く、「今や血證死を以て真理の證據と信じ得べき時代は既に過ぎ去れり、血證死は當り教義の真理なるを立證するの力なきのみならず、却て其疑惑を増すものにあらずや、見よ、何處にか幾何學的命題の真理を證せんが爲めに、死を甘んじたる幾何學者ある、真理は犠牲を要せず、只明白確なる合理證據を要するのみ、聖書中の奇蹟果して是の如き證據あるか」と、古文學の復興、科學的智識の進歩は勃然として、ルイテルの改革運動に呼應したりき。彼れが改革の主眼は、羅馬の宗教は眞に古の耶蘇教にあらざるものなりとせり、彼れ曰く、聖書は聖書として古に回して其儘に解せよ、教

權傳説の曲解は速に排除せよと云ふにありき、而して彼れは又羅馬法王を攻撃するに當りて曰く、「法王は眞に使徒保羅の繼紹者にあらず」と、新舊兩教の軋轢は主として聖書の解釋にあり、一は教權傳説の楯に籠り、他は之れを打破するにありき。彼れルイテルは激烈なる改革者なれども、教權傳説の絶對的打破者ならざりしなり、彼れは唯聖書に矛盾せる部分のみを打ち棄てんとせり、カルビン派は聖書の命令せざる一切のものを否定せんと主張せり、プロテスタントは聖書を以て唯一の證典とし、從來一切の傳説、解釋、命令を悉く抛却せんことを主張せりき。斯くの如き消息は耶教にも亦、教義解釋問題として、傳説相承論の熾んなるものありしを知るに足るべし、「歴史は繰返すもの」と、斯の語實に千古の真理なり、今に至るも猶同轍の争ひを繰り返しつゝあるにあらずや。佛敎の相承論に至りては更に重大視せらるゝの觀あり、佛敎の相

承論は、宗旨の血脈なり、教權の生命なり、法燈の繼承を得ずば法系を失せり、法系傳はらずんば道統の傳、何に依りてか後世に致すことを得むと云ふにあり。

現代に於ける相承論の價值

或は「血脈相承」と謂ひ、或は「智識相承」と謂ひ、或は「師資相承」と謂ひ、或は何、或は何、と謂ふ。凡そ佛教各派の林立せる中に何れの種類の相承論にか依らざるもの殆んど稀れなり。

古來この相承不相傳の議論は、中々盛んに行はれたりき、當時の思潮時代の信仰は、相承論に偉大なる勢力を興へたり、相承論の勢力は實に其宗派の盛衰興亡を左右したり。制宗權を有せる相承論の勢力範圍に存在せる宗派は、百方苦心して我れに相傳あり、我れに相承あり、我れは正統なり、我れは正嫡なりと主張するに至りぬ、然して相承相傳の精神は、何時しか失せ行きて形式をのみ捉らへ、骸骨をのみ遺すに至り、後ち漸く弊害續出し、其甚しきものに至り

ては精神の脱出せし骸骨を擁するのみならず、其爭奪、其偽造に全力を傾注したり、是れ則ち古來相傳の取り合ひ「讓狀」の偽造多き所以也。

古の道を貴ぶ儒教、ペイブル、を根礎に置く耶教、佛陀の金言を宗源とする佛教は、皆教祖の人格に偉大なる感化を受け、範を悉く教祖に取んとし、嫡々相承して異端を生ぜざらしめむとせしは、各其教徒の信念として當然の理なりと謂ふべし。勿論、此等の教泉滾々として涌き、縷々として紊れざるの間に於てこそ、いかにも神々しく神聖をも保たれ、敬虔の念をも加へられ、信仰の精神をも増さるれ。今や則ち然らず、時代は移り變りぬ、思想も變り來りぬ、僅に殘片の形式を擁して、此等の思想を緊々に由なく、病的の昂進せる曲解に據りて、此等の信仰を繼續せしむるに力なきを奈何せん。相承論の生命や實に衰々たる状態に瀕せるものあるを知れ。

現代に於ける相承論の價值

現代に於ける相承論の價值

相承論の實質、果して價值ある乎、無き乎は且く問はず、相承論が人心思想に價值ありと信せらるゝ間は、相承論は信仰權を掌握し得らるべく、宗命を司配し得べく。其信仰思想の續く丈け其生命も續き得べく亦多少の勢力をも存續するならむ。然れどもこの信仰思想の如きは今や人心より一掃せられたり常識よりは最早排斥を受け崇拝せられざるに至りぬ。記憶せよ、合理は何處迄も合理なり、明確なるものは何時にても明確なり、豈區々たる形骸的相傳相承を求むるの要あらむやとは、是れ相承論に對する今日の思想なり、實質なき相傳に對する不信仰の聲なり。

斯く不信仰の思想湧起して、第一の關門を破りぬ、第二の關門に向ふ所の疑問は、相承論に於ける根本的疑問是れなり。根本的疑問とは、相承は元來正しきものなる乎、過誤なきを得たる乎と云へる以上、相承相傳なるもの、根本的無用物なりと云へる絶叫の聲是れ

なりとす。斯の思想を懐くものは、道理に依りて古の道を説き、道理に依りてバイブルを解し、道理に依りて經典を解するの正當なるを主張するものなり。如何となれば正しき相承なれば恐らく合理なるべく、正しからざる相傳なれば恐らく不合理なるべし、相承に依るも依らざるも、價值の岐るゝところは其合理なると不合理なるとにあり、依るも依らざるも合理は合理なり、不合理は不合理なり、要は唯合理的能力を有するにあるのみ。この思想勃發して相承論の勢力漸く西山に傾き、相傳説の命數且夕に迫りぬ。

今時、知識を訪ねて相承を望まんとするも、其知識に乏しく、人師を尋ねて法燈を紹繼せんとするも、師徳の存するなし。吾人は之れを感ふ、眞實の道は何ものに依りて識得し信得し能ふ乎を。感ふことを止めよ、道理は天地の道理にして天地の公道なり、眞理は世界の眞理にして世界の共有なり、豈一人の手に私するを聽さむや。

現代に於ける相承論の價值  
偽り多き形式の相承、杜撰極まる師資相承、今に於て何の施すところかある、唯價值を有するものは道理のみ、理義のみ。若し夫れ相承の語を借り來つて強ひて名けば、理義の相承とも、合理の相承とも謂ひ能ふべし。道理は一人にも存し、萬人にも存するなり、何者能力の存するところには何人にも存せざるの謂れなければなり。世を愚弄することを止めよ、實質の伴はざる形骸の相承相傳、今や既に三文の價值なきを暴露せり

上莫辱君親下莫私妻子莫干過情譽莫避無妄毀借禍在言語納佞在矜侈仰天原所稟俯地敬所履知足以守分慎幾以欽止末路輒易頭尤警廢且弛斯學在終身斃焉而後已

癸卯正月吉日書此以自矢七十二老人坦

佐藤 坦印

一齊陣

(眞筆の寫)

#### 四 統一的宇宙論

「法とは何ぞや」とは、是れ宇宙論に於ての大なる問題なり。

人或は法即ち宇宙の實相を理的に見るものあり、或は之を抽象的に取扱ふものあり。然れども實相なるものは宇宙の實體なり、理的に見るべからず、又抽象的に取扱ふべきものならず、無始無終の時間に於て無窮無限の空間に於て宇宙に實在せる森々羅々たる、大小巨細、迷悟染淨の共存場、現體其儘の具體的のものたるなり。

「太極」より萬法を出せりと言ふも「造物主」より造り出せりと説くも、「眞如」より現出せりと論ずるものあるも、然れども、始もなく終もなき時間、限りもなく邊りもなき空間に於て常住に實在せる宇宙の凡ての實體が、造り出さるゝ必要もなく、生み出さるゝ必要なきあり、必要な事實茲に存して誰れか必要な事の恐を學ぶものあり、

らんや。畢竟、宇宙論の整足せざる所以のものは、其根底に迷ひ窮し  
て、甲論乙駁の状を呈するに至りたるものと謂ふべきなり。

吾人はこの宇宙實相の内に在りて、進退し出沒するものなり、吾人  
は宇宙實相の以外に立つものにあらず、宇宙の實相も亦、吾人を離  
れて遠く別に存在するものにもあらざるなり。然れども宇宙の實  
相は大にして且廣し、大にして且廣きこと實に無窮無限なり、無窮  
無限なるが故に吾人の小を以て見るべからず又解すべからず、不  
可見『不可解』なるが故に吾人自身は宇宙實相の共存仲間として存  
在しつゝあるにも拘はらず、猶之れを知らず解せざるなり。知らず  
又覺らざるが爲めに、吾人以外に於て遠く別に、太極の存在を建立  
し、漠然混然の間に真如の理體を抽象す。恰も是れ蟻の富士山に於  
けるが如し、蟻は餘りに小にして富士山は餘りに大なり、餘りに小  
なるものは餘りに大なるものを見る能はず、吾人の宇宙に對して

の渺小なるは、蟻の富士山に於けるの比にあらず、宇宙は餘りに無  
邊なるが故に吾人の眼界は餘りに有限なるが故に、宇宙の實體を  
見る能はず、吾人と實體との關係をも知る能はざるなり。

宇宙實體の外に於て別に造物主を設け、太極を立て、真如の理體あ  
りとするは是れ凡見の造れるにあらずや、是れ小觀の見にあらず  
や、是れ蟻の見たるにあらずや。

有限の眼を以て、無限の大を律せんとす、宜なる哉、宇宙論の片々區  
々に終るを常とすること。

然らば則ち吾人は宇宙の不可思議なる故に、宇宙に向つて全然黙  
して止むべき乎、否、吾人は古より黙して止まざるものなり。吾人は  
之を知らんと欲して止まざるが故に、吾人の哲學となり、科學とな  
り、將た宗教となりて之を解せんことに努むるものなり。茲に於て  
乎、種々の研究起り、種々の想像出で、種々の理想涌き出で、或は一元



統一論宇宙論

論となり、或は二元論となり、或は三元論となりて種々の宇宙論を  
作るに至れるなり。

宇宙の實體に名くるに、種々の稱號を以てせり、其稱號の如きは法  
と謂ふも、實相と謂ふも、理體と謂ふも、真如と謂ふも、太極と謂ふも  
神と稱するも、猶其他幾十種の異名を以てするも可なりと雖も、其  
法の本體則ち宇宙の實體までも亦、名稱の種々に存する丈け夫れ  
丈けに種々なる異見異説を分つに至りては、過誤の甚しきものな  
りと謂ふべし。

世に一元を以て宇宙を解するもの、二元を以て解するもの、三元を  
以て解するものあり。一元必ず不可なるにあらず、二元三元必ず可  
なるにあらず、要するに唯其講明説論の當否の如何に依りて相岐  
るゝなり。何者、單唯物的、若くは單唯心的の一元論たれば、到底之れ  
を今日に施すの價值ある能はず。然れども萬法唯一心と立つる其

一心内裏に、萬法を具備したる彼の大心境なりと云はゞ、其大心境  
には二にまれ、三にまれ悉く包含して攝し盡くさるものなきに  
至れり。果して然らば、一元必ず一元ならず、物心兩立したる上の一  
元論なりと謂ふべきなり。

今世に歡迎せらるゝ議論は多く三元論にあるを見る、然れども其  
三元中の一を天神、若しくは理體に取り、斯天神、理體は他の者の、凡  
てを生み出せりと云ふにあれば、吾人は斷じて首肯し能はざる也。  
之を思惟せよ、宇宙は大の大なるものなり、宇宙は廣の廣なるもの  
なり、豈に三世に窮りなく、横に十方に周ふして限りなき、無始無終、  
無際無邊なるものなり。然り、斯の宇宙の實相全體は決して、理想的  
一相無相のものにあらず、萬法の事物宛然として實在せるを謂ふ、  
之を稱して『三千事常住の法』と言ひ、又斯の不可思議境を稱歎して  
『妙法』と唱ふるにあらずや。

統一論宇宙論

統一論宇宙論

斯の廣大なる宇宙法界の實體は、萬有の事體其儘のものにして而も亦、迷悟あり、染淨あり、彼れあり、我れある共存の一大團體なりと謂ふべし。而して斯の團體共存者相互の關係は實に無始已來の關係にして須臾も分離すべからざるなり。然れども迷者は迷見の爲めに分離するものと思へるなり。茲に於て乎、彼れ等は差別を生じ、愛憎を發し、利己損他の物慾を逞ふするに至りぬ。覺者に至りては迷妄を驅り、物慾と戰ふて、彼れは暫くも慈悲の發動を息めざるなり。

斯くの如く宇宙法界は、最も高さものをも有し、最も低きものをも有し、聖者も在り、愚者も在り、迷者も居り、覺者も居る、迷悟賢愚の相離れざる凡ての共存せる大天地なり。宇宙界の實體を達觀して大自由を得たるものは、共存の地位最も高さものなり、吾人はその實體を達觀せる、自由なる、慈悲ある、深厚なる同情者と共存すること

を得たり。

吾人にして一旦、宇宙實體の全體に於ける、吾人との關係の深き所以を想起せんか、吾人は吾人の眼見の餘りに小なりしに驚かざるを得ざるべく、又自己の迷見を恥ぢざるを得ざるべく、彼れ大覺者の恩寵に感謝せざるを得ざるなり。斯の信念思想の對境として宗教は、實體を待つのなり、則ち法を本尊とするの根本義を成じたるなり、若し然らずして、實體を以て單に理的と認め、無相なりとして之を見了らば、是れ活物の實體をして死物たらしめ、法其ものい光顯をして失墜せしむるに至る、豈鑑みざるべけんや。

甲論乙說、所々に散見したる宇宙論は、或は一元を主張し、或は二元三元を主張して其議論多岐に渉るものあり。然れども無量義は一法より生ず」と、宜なる哉、誠に斯の一大宇宙は、一元に限らず、二元に限らず、三元に限らず、諸元共に無限に實在せりと謂ふの一義に

統一論宇宙論

統一の宇宙論

歸するなり。若し夫れ宇宙實相の名の下に、或は理體を説き、或は無相を論ずるの間は、未だ以て實相論の根底を得ざるのみならず、諸法統一の中心を得る能はざるなり。

『畧開三顯一の時、佛略して一念三千心中の本懷を宣へ給ふ、始めのことなれば、時鳥の初音を、ねをびるたるもの、一聲さしたるがやうに、月の山の端に出たれども、薄雲の掩へるが如く、かすかなり』(開目鈔)と、佛教の宇宙論は、各種に分れたるも漸く進んで宇宙實相論の歸結統一を説き、彼の無量義の一相無相の域に至らしめ更に進んで、實相論の組織構成を見るに至りぬ、然れども未だ實相論の根底を築くに至らざるなり、薄雲の月影を掩へるに比したるものは是れなり。

然らば則ち實相論の根底は何ものによりて明確にせられ得る乎、是れ吾人の頗る注意を要する問題なり。須らく知るべし、宇宙の實

相に達觀せる彼の大覺者、知道者、開道者、説道者の根底を第一着に捉へざれば、其宇宙の實相も亦、明確ならざるの理あることを、然り、大覺者の根底を明確ならしむるとは、他なし、今の大覺者は、今の大覺者と謂ふのみにあらずして、無始の大覺者なり、無始の大覺者と云ふのみならずして亦、無終の大覺者たるなり、無始無終の大覺者と云ふのみならずして亦、無際無邊の大覺者たるなり。

斯くの如く時間に涉り、空間に徧ふして周足せざるなく、活動せざるなき宇宙實相の中の共存長たる大覺者の地位根底は、無始無終なり、無際無邊なりとの理義第一初番に明確となり、『迷悟一體』、『依正不二』の理、顯現して然る後、宇宙實相の中の吾人凡俗の者に至る迄同一に皆、其本體は無始に常住なり、無終に常住なりとの義を成ずるに至らん。迷悟一體の理、明確となりて、依正不二の義、愈明確となり、依正不二の義、明確となりて、宇宙實相の事體常住なることを明

確に知るに至らん。  
 迷悟一躰、依正不二、萬法一如等の絶對不可思議境則ち、根底ある神祕の開顯せられて、始めて宇宙論の根底は確實となる。茲に於て乎、諸多の宇宙論を包含せられ、雜多の實相論をも統一せらるゝに至るなり。

宇宙の實相は、理想的ならず、抽象的ならず、具躰宇宙の實相體たるなり。  
 宇宙の實相體は、理的のものならずして、萬有の全體なり、森羅三千の現象體の凡てを云ふなり。故に宇宙の實相體は神の所造にもあらず、太極より出て來るものにもあらず、理躰より涌き出てたるものにもあらず、無始已來事體常住のものたるなり。  
 然り、宇宙の實體は斯くの如くにして、宇宙共存長の大覺者の無始常住に暫くも止むなき、温き恩寵に光被せられて、吾人の地位を向

上せしめ得るなり。斯く信念を把住するを宗教としての、宇宙論に對する眞面目なりと謂ふべく、法本尊の由つて來る所以も恐らく茲に存するならむ。

若し夫れ宇宙の實相則ち法なるものを、單理のものに見、若しくは六大事法のみに見了らば、是れ實に乾燥無味なる砂礫瓦石の死法となりて、毫も吾人の信境と爲すの意味あらざるなり。宇宙實相の共存團體の中に九界の迷、一界の悟、共存援引するの意味を有して茲に、實相の共存體を完全ならしむるの理義を有するが故に、吾人は法なるものを吾人の向上境として、認識すべく、吾人と法との深厚なる關係を有する意味をも識了するなり。

天人論は言へり「宇宙は萬物の總體を合稱せんが爲め便宜に設けたる空名にあらず、一個確實の實躰なり」と、是れ實に今の世に於て稀れに見るところの卓見也、之れを彼の宇宙の事物は天神の造る

統一的宇宙論

所なりと謂ひ、又宇宙の事物は、理體より生じたるものなりと謂ふ、  
 理的中心の宇宙論、天神中心の宇宙論に比するに、其論式の超越せ  
 る敬服の至りに堪へざるなり。然れども天人論子の宇宙論の中心  
 は、或は心的傾向にあらざるかを疑ふものなり。之れを直に天人論  
 子の言に聴かしめ、「宇宙冥晦、萬有濛々、物質あれども意味を爲さ  
 ず、花咲けども色を爲さず、鳥啼づるも音を爲さず、眞に所謂る漠々  
 の中に物體動と分子動との暗闘するあるのみ、唯一心ありて萬物  
 忽ち耳目を生ず、死せる者活き、心無き者活躍し、默せる者嬉笑す、畫  
 龍點睛も其妙を喩ふに足らず、眞に心なる者は光明なる哉」と、豈是  
 れ唯心的ならずとせむや。然れども心的中心必ずしも不可なるに  
 あらず、要は唯其論式説明の如何にあるべし、若し其所謂る心なる  
 ものが凡俗の心ならずして宇宙の實體に到達せる覺者の心の中  
 心とするにありと謂はば、吾人は歡んで之れを迎へんと欲するも

の也。

若し又迷悟の撰擇なき、單的凡心を中心とするにありと謂はば、吾  
 人は其議論の矛盾に歸せざるなき乎を疑ふ所なく、ひばあらず。所  
 以者何、天人論子は一面に於て斯く言へり曰く「忘るゝ勿れプロヒネ  
 ル、やヘツケル、の觀る眼界とても、實は其億兆無數の世界を合せて、  
 猶是れ全宇宙の浮塵にだも足らざる一小部分なることを、彼等は  
 百億年を洞觀して論を立つると雖も、彼等の觀る百億年も亦唯だ  
 蟬蟬の一日のみ、彼等又何ぞ明日の旭日を知らむや」と、是れ吾人凡  
 眼の墓なき所以を言ひ嘆ちたるにあらずや。而して彼れは他の一  
 面に於て又言へり曰く「人の眼睛は直徑一分に足らずと雖も實に  
 能く三千世界を藏す」と、是れ吾人心眼の大なる活動あるを言ひ誇  
 りたるものならむ。今この兩面を推合するに、吾人の心眼は閉ぢて  
 藏する間は彼れ程のプロヒネル、も小蟬蟬のみ、然れども其心眼の開

統一的宇宙論

かるに於ては、宇宙の絶対境を達観したる覺者の心眼と同一なる意味を藏有せりと謂ふにあるものゝ如し。并は之れを天人論子の左の言に依りて證するを得べき乎、曰く「其自觀に於て直ちに宇宙無限の大自然と交感し神通すればなり」と然り交感し神通するは心眼の開かるゝなり、凡俗の心眼閉藏の上にはあらざるなり。吾人にも具有を論じ得べしとは雖も、凡眼は隔てゝ融會し能はざるなり、故に藏の儘の吾人を目して凡見と言ひ、俗眼と言ふ。吾人は之れを惟ふ、縱令、唯心的のものとするも其心的は宇宙を悟覺したる大覺者の證果を中心とせる、大なる心的ならざるを得ずと。然れども天人論子の其心を得たるや否やは知らず、世に著者の心を得ずして譏歎し、批評を加ふる程、愚なるはなし、幸に恕せよ。

吾人は然かく信ぜざるべからず、宇宙の實體は無始に實在し、無終に常在し、無際に周遍し、無邊に活動しつゝある『生死の若しは退若

しは出あるゑと無し」との廣大なる宇宙の實體たらざるばあらざることを。十界三千の實體的宇宙論は片々區々の宇宙論を包含し、統一して餘すことなき大宇宙論なり、之れをこれ統一的宇宙論とは謂ふなるべし。然り、吾人が宗教として法を本尊とするに當りて鑑みよ、諸餘の宇宙論にては到底宗教の信境たる法の成立を見る能はざることを。

吾人は凡夫たり、迷者たり、煩悶者たり、而して又聖人たることを得、覺者たることを得、解脱者たることを得るものなり。

吾人は宇宙に共存せる大覺者の光被に接觸して、冥暗たる心眼を開かむことに努むべきなり、是れ宗教として宇宙實相論に對する、敬虔の態度ならずむばあらざる也。

芥子臺中法界居  
誰知百億須彌外

九山八海一隣虛  
四聖六凡容有餘  
(艸山元政)

統一的宇宙論

五、統一的人格論

宗教の信仰對象には概ね人格多し、耶教の人格的天神の實在を説けるは勿論、佛教にも亦人格的對象の甚だ雜多なるを見る。佛教を外面より見れば、佛教は恰も多神教なるかの如く、未開宗教の狀態を呈せり。曰く阿彌陀、曰く大日、曰く藥師、曰く觀世音、曰く毘沙門、曰く帝釋、曰く不動等の幾千萬の人格的諸佛諸天は、雜然として信仰の對象となりて吾人の前に排列せられぬ。

借問す、佛教の教理は果して斯くの如く雜然として中心なきもの乎、統一なきもの乎。否、然らず、諸佛諸天の因つて來れる其内容に、脈絡あり、本末あり、中心あり、統一あるべし。然れども世の多くは誤つて、佛教教理の脈絡と關係の罅を逸して、支離滅裂に歸せしめたり、條然たる本末の因縁を失却して分烈せしめたり、分烈又分烈殆ん

ど底止するところを知らざるに至りぬ。去れば一佛、一佛の誓願に信頼して各自の仰望せる佛陀を勸請するものあり、或は菩薩の本事因縁に信頼し、或は諸天の誓護に信頼するところあり、分烈し摘取し來りて、個々別々之に養ひ、會て斯の間に脈絡貫通の存するものあるを願みざるもの、如し。嗚呼、分烈の末に奔りて、脈絡を失ひたる雜信仰の狀態を見よ、彼れ等は末の末なる一法語を據守し、區々たる隻神咒に迄拘泥して、一步も一貫の大道に出づる能はざるもの、滔々皆是れなるにあらずや。

脈絡貫通の理義、人格の中心は、宇宙論に根底して、之れを開顯論の解決に待たざるべからず、既に前項に於て論ぜしが如く、宇宙論の共存長は則ち宇宙の實相に達觀せし大覺者たることを忘るべからず、又斯の大覺者は迷悟染淨に超絶せし、宇宙の大本主なることを配憶せざるべからず。宇宙の大本主なるが故に宇宙を司配す、司

配力を有するが故に宇宙に活動を起し得るなり。勿論、一人の衆生を中心として、この宇宙を見れば、この宇宙は一人の宇宙となるべし、然れども凡俗は斯理を解せず、實用に供する能はざるなり。斯理に通じ、斯理を活動に移し得るものは大覺者に外ならざるなり。然り、宇宙よりして之れを見れば、覺者も迷者も共に宇宙の一部に包まるものなり、然れども覺者の達觀よりして之れを見れば、宇宙全躰の凡べてが、大も小も、巨も細も、三千の羅々物々、迷も悟も、染も淨も、十界の互具融即して、悉く大覺者の大なる活動作用に包まれ盡くさるゝなり。

大覺者は宇宙の主人公なり、未達者は伴屬なり、伴屬の多くの部分は概ね冥晦に覆はる、宇宙に居して宇宙に達せず、宇宙に達せざるが爲めに、宇宙を死物にす。主人公は大覺せり、大覺あるが故に、大なる光被力を有す、光被力あるが故に、宇宙全躰に不可思議作用を起

し與ふなり。

盛んなる哉、達觀の力や、大覺の用や、宇宙は達觀の覺者に依りて生命を興へられ、活動を起し得るなり。蓋し宇宙全體は大覺者の知遇を待つて始めて活けるなり、活きて而して衆多の作用を起すなり、是れ其達觀の光被力ならずや。

大覺者は斯くの如く大なる根底を有して立ち、宇宙と共に無限なり、宇宙と共に悠久なり。否、この悠久無限は覺者の達觀力なり、覺者の無限實在なる意義の開顯せられて始めて宇宙の無限實在なることをも知り得たるなり。

佛敎の開顯論は其根據を明確に示せり、曰く。

『如來の祕密神通の力を一切世間の天人及び阿修羅は、皆今の釋迦牟尼佛は釋氏の宮を出て、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり、然るに善男子、我れ實



統一的人格論

に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由陀劫なり。法華經第六如來壽量品)

と、以て歴史を有せる覺者は、大悟して無限に接觸せり、現身佛と法身佛とは一躰となれり、始覺と本覺とは不二となれり、一躰不二の故に始めにして始めにあらず、今にして今にあらず、久必ず久ならず、遠必ず遠ならず、新舊一貫、古今一鎖の大覺者たることを知り得たり。

無限に實在せる覺者は、宇宙の大を包容して、時間にも空間にも其光被周ねく、或は自らの形を以てし、他の身を以てす、或は自らの聲を以てし、他の音を以てす。今吾人をして大覺者の言に傾聽せしめよ。

「或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す。」如來壽量品第十六。

と、去れば觀音の三十三身を現ずると云ふも、妙音の三十四身を現ずると云ふも、藥師の十六願も、彌陀の四十八願も及び、諸佛諸天の本事因縁も悉く皆、始本不二の釋迦大覺の中心、偉大なる本願力より發したる無限の光被に外ならざることを知り得たり。

之れを吾人に聽かずして、覺者自らの言に證せよ。

「諸の善男子、是の中間に於て、我れ然燈佛等と説き、又復其れ涅槃に入ると言ひき、是の如きは皆方便を以て分別せしなり、諸の善男子、若し衆生有つて、我が所に來至するに、我れ佛眼を以て其信等の諸根の利鈍を觀して、度す可き所に隨つて、處々に自ら名字の不同年紀の大小を説き、亦復現じて當さに涅槃に入るべしと言ひ、又種々の方便を以て、微妙の法を説ひて、能く衆生をして歡喜の心を發せしめ。」如來壽量品第十六品)

と、始終を通じ、古今を貫きての中心點あるを窺知するに足らん。恰

統一的人格論

も天の一月萬水に映じて、千影萬態と爲れる如く、一の本覺者を擧げ來らば、何ものか能く之れに攝し得ざるものあらむ。佛々を攝し、權化を攝し、諸天を攝し盡くして、萬枝の一根に歸すべき脈絡あるを示しぬ。

統一的人格論

若し夫れ斯の脈絡關係を解し得ずして、諸佛菩薩の假名に固執し、權化の方便に拘泥せば、是れ恰も根を忘れて葉に就き、源を離れて流れに奔るが如く、一貫の脈絡は紊亂滅烈して、毫も統一ある活動を爲し得ざるに至る。統一ある活動を爲さんと欲せば、其統一の本體を認識せざるを得ず、本體を認識せずひば、其本體より發現せる諸佛菩薩の出生本籍を知る能はず、随つて其活動をも休止せざるを得ざるなり。之れを彼の電氣力に例せん乎、本體は發電所の如く、個々の佛菩薩、諸世天は、個々に備置せる電燭の如し、個々の燭光の其明と暗とは、之れを發電所の本源に歸せざるを得ず、發電所の本

體と作用とを認識せずして、個々の燭光にのみ依頼して足れりとする者あらば、誰か其迂屈を憫笑せざるものあらんや。

古來佛學上、佛身論に於て二身論、三身論あり、又種々の歷程ある佛身論ありと雖も、畢竟是れ佛陀の體用を論じたるに過ぎず。如何に佛陀の體用を巧に稱成すと雖も、開顯論に根底を持たざる佛身論は其根底なく基礎なく、範圍狭くして到底、佛身論の完結を告ぐる能はざるなり。宇宙論に立脚して、開顯論に啓沃せられたる佛身論こそ單り根底深く、理義明確、佛身論の徹底を叩き得べけれ。

這箇の佛身論に基礎し得たる大覺者は、高く三世に、周く十方に大活動を起すなり、彼れが活動を起すや、彼れが活動の中に宇宙一切の活動を包容して大活動を爲すものなり。この絶對無限の活動の上には、獨り佛教の經傳に顯はれたる佛菩薩諸世天を統一するのみならず、異教徒、異邦人の信仰を捧ぐる「神様達」をも普ねく包含し、

總統し得て餘すところなきなり。大覺者の活動とは、各其所を得せしめ、安住せしめ、向上せしむるを意味するなり。經に云く、『所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず』(壽量品)と、斯くの如く無限絶對の不可思議境に達到したる、覺者の本體を認識せば、彼の散漫たる多神、雜然たる佛教の狀態をして、能く脈絡貫通せしめ、能く綜合統一せしめ、能く中心を確保せしむるなり。斯くして然る後、本尊の對象に巧妙なる組織を發見し能ふべきなり。然りと雖も斯統一中心の大覺者即ち本佛なるものは、果して何れの覺者に歸すべき乎は、是れ亦由々敷大問題たるべき也。統一中心を何れの佛陀に取るべき乎の問題に就きては、吾人は茲に三大理由の存在せるものあるを見る、曰く。

- 一、歴史上の大因縁、
- 二、諸佛化境の差異、

- 三、釋迦自己の顯本、

この三個の理由は嚴然として吾人に明確なる指針を與へぬ。歴史上の大因縁とは則ち歴史的佛教なり、史的佛教とは印度に降誕せられたる、釋迦牟尼佛より開示せられたる佛教を言ふ。教理上に散見したる人格あり、非人格ありと雖も、皆是れ史的佛教に見はれ、亦史的佛教に説かれたるものなり。現時世に存在せる諸宗諸派の佛陀中心の見解多し、或は大日を中心、或は彌陀を中心、各其見解を主張せるものありと雖も、皆一として歴史的釋迦の説經指導の下に立宗せざるものなく、又歴史的釋迦の説經を除きては他に依るべきものなく、又彼の教理上の法と人との存在をも知り得べからざらん。斯の關係あり、斯の因縁あり、佛教としては釋迦を中心、置きて、統一を爲すべきは當然の主張なりと謂ふべし。

統一論人格論

次に諸佛化境の差異とは、無限絶對の上には差別個々の化境を論ぜず、無邊に活動するものたりと雖も、且らく相對に降りて諸佛化境説に鑑みるも、釋迦は斯の世界の教主たること明かなり。曰く「我釋迦牟尼は娑婆國土に於て、阿耨菩提を成す(化城喻品)」と、又曰く

「三千大千世界(娑婆世界)を名けて一佛世界と爲す、是の中に更に餘佛なし、實に一の釋迦牟尼佛、是の一佛界の中に、常に種々の法門、種々の身、種々の因縁方便を化作し以て衆生を度す(大智度論九)」と、諸佛に於ては各修各行の差異あり、各誓各願に隨つて化境を異にし、其身を現すること不同ありとせば、釋迦は正しくこの土を取らば出現せられたるものと謂ふべく、藥師は淨瑠璃世界、彌陀は安養世界を撰びて各其教主たりと言ふべし。この相對的化境説に依るも釋迦のみ獨り此土の教主にして、諸佛は他の土の教主たり、此

土には教主たるの因縁熟せざるものと謂ふべし。斯の如きの因縁あり、關係あるが故に、此土の教主たる釋迦牟尼大覺世尊を以て、統一の中心と定むるは、是れ亦至當の理にあらずや。

又次に釋迦自己の顯本とは、既に開顯論旨の下に陳べたるが如く、歴史上の釋迦即教理上の釋迦なることを宣言せられたることは是れなり。彼れは無始に常住にして亦、無終に實在せり、豎にも無限、横にも無窮なることを宣言せられたり。彼れは三世十方に周遍して化益止むことなく、或は自身の名を以てし、或は他の名を用てす、一切の諸佛は彼れより出て、亦、一切を彼れに攝收せらるゝの意味をも宣言せられたり。斯の如く三個の理由に依り、統一中心の佛陀を何れに取り定むるかの問題に於ては、吾人は之れを疑問とするまでもなく、統一の中心點は釋迦牟尼佛に結歸すべきものたることを正當として主張するもの也。

統一論人格論

統一的人格論

若し夫れ佛教にして「統一」の意義を無視して、其弊の出づる所に委ね置かば、佛教は恐らく散漫たる多神主義の宗教状態にて終らむ也。噫。

秦人不暇自哀、而後人哀之、後人哀之而不鑑之、亦使後人而復哀後人也。

(杜牧之)

第三 結論 我國將來の宗教

宗教の資格を問ふこと

宗教の性質を撰ぶこと

本尊と信仰との完備

國あり人あれば宗教なかるべからず、宗教の必要あればこそ、兎も角も今日に至る迄衆多の宗教は、熾然として信仰界に繁昌を極め勢力をも占め得たるなれ。宗教の必要なるは固より論なく、猶身軀に衣食の必要なるが如く然り、吾人の信仰界に於けるも亦同じきなり。吾人の精神亦何等かの信頼する所のもの、無からざるを得ざるは是れ亦當然の理なりと謂ふべし。

茲を以て宗教を興へざるも人自ら造りて、人自ら信ず、人自ら造り

宗教の資格を問ふこと

宗教の資格を問ふこと  
て自ら信ずるに至る程のもの。若しそれ之れに宗教を説き與へん乎、宛然虎の飢たるが如く、其性質を問ふに遑あらず直に取つて、精神界の要求に充てんと欲するに至らん。是れ其例を東西共に示す所にして、宗教の一日も吾人に欠くこと能はざる所以にあらずして何ぞや。

宗教の必要論に關しては各項を類ちて説明すべきもの多しと雖も、然れども、最早今日にして宗教の必要論を繰り返すの要なきを信ずるものなり。然らば則ち今日に於て何もの乎必須なる、曰く、宗教の資格を問ふこと、曰く、宗教の性質を撰ぶことは是れなりとす。我國將來の宗教の資格としては、本論第六宗教資格の各節に論陳せるが如く、將來吾人の信すべき宗教資格の一としては合理的ならざるべからず。背理的宗教は、國家をして背理ならしめ、人をしても背理ならしむるの恐れあるが故なり。

次に我國將來の宗教資格としては、活動的ならざるべからず、彼の着世主義の一方に奔るの非なると共に、厭世主義に陥り、寂滅主義に偏するの非なるを知らざるべからず。宗教は大信念の基礎の上に立ちて、活動すべきものたるなり、活動せざる宗教は死灰なり、宗教たるの資格なきものなり。

次に我國將來の宗教としては、道德的宗教ならざるべからず、自然的宗教、動物的宗教は勿論、其他凡ての迷信的宗教は、背徳の行爲となり、道德を破るの信仰となりて其害の及ぶ所、大なるもの存りて存すればなり。

次に我國將來の宗教としては、國家的宗教ならざるべからず、或は平等主義の一面に傾くあり、或は個人主義の利己に奔るものあり、共に是れ國家を危殆に陥らしむるの主義たるなり。宗教は平等の一面存すると共に、亦、差別の一面あるべし。宗教の平等を稱するは、

宗教の資格を問ふこと

宗教の資格を問ふこと

神道を謂ふの時なり、宗教の差別を説くは用道を開くの時にあるべし、共に宗教上欠くべからざる必要物たるなり。宗教は用道より發して差別門に出て、差別門より活動に移るもの、豈唯神道のみを籠居して止むものならむや。國家の基礎を鞏固にし、精華を確保する爲めに國家より宗教を要すれば是れ亦、謂ふまでもなく國家的宗教ならざるべからざるは、當然のことなりと謂ふべきなり。

次に我國將來の宗教としては、統一的宗教ならざるべからず、世に所謂理想主義あり、神祕主義あり、倫理主義あり、超倫理主義あり、現世主義あり、未來主義あり、及び衆多の主義あり。然れども皆是れ一局部に着眼せる極端のものにあらずるはなし、今後の宗教としては、此等の各主義を包含したる、濶大なる統一的宗教にあらずむば不可なるべし。若し夫れ各々個々に分張し分立し行くに一任せば、終に一個の信仰界は支離滅裂となり、國民の精神思想は區々に亂

離して、思想上の統一なき國家とならむを憂ひて止まざるなり。故に國家として宗教を要すれば、吾人は躊躇なく、統一的宗教ならざるべからざることを主張するものなり。

斯くの如く、合理的、活動的、道德的、國家的、統一的の五個の資格を具する宗教を、我國將來の宗教として吾人は之れを要求せざるを得ざるなり。

次に我國將來の宗教として撰ぶべきものは宗教の性質なり、宗教の性質を知らむと欲せば、其信仰の對象たる本尊の性質を知ることを第一なり。本尊なるものは吾人信仰の標的なり、若し其標的にして不確實、不道理なるものならば如何、いかに信仰あるも、熱誠あるも、亦は唯迷信過誤にして了らむ而已。故に本尊の性質は確實なる基礎を有し、道理あり根據あるにあらずんば、吾人は之れを信ずる能はざるなり。而して又彼の架空の想像的本尊を造り、雜亂的多神

宗教の性質を問ふこと

の本尊を並列し、若しくは乾燥無味の信境を假立するもの、如きは皆是れ我國將來の宗教として、吾人は之れを歓迎する能はざる也

宗教の性質を調ふこと

吾人は我國今日の思想潮流が、稍精神界の問題に傾注し來り、宗教問題にも亦稍注意を惹き起すに至りしを大に喜ぶものなり。然れども未だ其道程の遅々として進まざる、猶牛歩の如き觀あるを憂ふるものなり。世に宗教を言筆に訴ふるもの多し、然れども彼れ等の多くは概して本尊の性質問題に及びしものなく、甚だ本尊論の輕々に看過せられつゝあるを見る。宗教にして本尊論の講究區域に入らざるものは、迂遠なる初歩なり、筈蹄なり、途中にして彷徨しつゝあるものなり。未だ以て宗教の全價値を手にはせざるものなりと謂はざるべからず。然して次に來るべき必要は、信仰問題是れ也。

いかに宗教の資格を全備せりと謂ふも、本尊の性質は完美せりと謂ふも、完全なる信仰論、即ち完全なる信仰修行の方法に依らざるべからず。若し誤つて宗教を單に理性的のみに追込めて、毫も之れを實驗の方面に訴へざる一種の宗教の信仰。又空腹高心の輩が、自己を本尊として高さより高さに登り詰める一種の宗教の信仰。又餘りに自己を謙下するに過ぎて、自己を蔑滅し了り自己の信仰對境の如何を問ふに違あらざるが如き一種の宗教の信仰等。此等諸般の信仰は、宗教信仰として價値なきものに屬せり。之れを本論の第七本尊と信仰との下に於て聊か論陳し置きたるなり。請ふ之れを一讀せよ。

吾人は今茲に我國將來の宗教としては、耶教を取るべき乎、佛教を取るべき乎、將た亦其外の宗教を撰ぶべき乎否乎を詳論するの追なしと雖も、本書の全躰を速讀翫味するに於ては、我國將來に取る

本尊と信仰との完備



本書と信仰との完備

べきの宗教は、自ら紙上に躍如たるものあらむを信ずる也。  
我日本は今や、戦勝の新興國たるなり、世界環視の中に立てるなり。  
戦勝の地位に立つて、經營施設すべきもの多し、就中、宗教問題は重  
要問題也、國家の資格問題也、戦後に處する一國の品性問題也、國民  
の精神問題也、愛國の士は、奮つて本問題を解決せよ。  
斯の一小冊子、能く其意を盡し得ず、然れども、唯其希望のみは能く  
盡し得たりと信ず。

~~~~~  
書にして、若し其心より出でたるものたらば、  
必ず終に他人の衷心に透徹すべし。(カーライル)  
~~~~~

# 興國の宗教 終

## 著者の略歴

御諱は日教、字は貞雄、本常院と號す、華城と云ひ三勿道人と稱するもの皆その別號なり、兵庫縣の名族清瀨國太郎氏の三男、實名は虎之助と稱す、元治元年六月廿九日を以て播磨縣時郡香呂村大字田野に生る、明治八年十月十二日年始めて十二、難路妙行寺大僧正眞枝日完師(本妙法華宗)に就て剃髮、十二年四月小栗栖檀林に入り、十四年某解の事班に轉じ、初釋法論を行ひ教師輔に任ぜらる、十五年四月迄職終了、十七年文句に進み正教師となる、此間難路の滋養備伊奈讓翁の情誼及碩儒龜山雲平先生の門に出入して皇漢學を兼修す、十九年九月友を負ふて東都に遊び中村敬堂先生の同人社及哲學館に學ぶ、廿二年四月所感ありて顯本法華宗に歸入し、板垣日暎大僧正の附弟となり、受験權少學統に補せられ、爾後果選して僧正に至る、

廿四年丹波綾部了圓寺に、廿七年淺草慶印寺に、三十年大坂蓮成寺に住職を命ぜられ、到る處化益多ならず、  
廿二年の公會書記、大學林寮長兼理科助教授、宗會正副議長の再獲得々環、本山部長、教務部長、宗務總監兼法務部長、十  
四教區管掌及常置布教員、格育問題外交委員、宗門要務編纂委員等、公職に従事せしこと多々、  
資性溫雅にして剛直、最も文章に長じ著述多ならず、終始一貫熱誠二利の増進を企圖す、情誠、痛脚の實常に藥石と視み、  
明治四十一年十月十一日没焉として鳥養す、世壽僅かに四十五法臘三十四、

此書も明治三十八年の春、著者大に時事に感ずる所ありて筆を執りしもの、積成りて「興國の宗教」と題し、當時之を公にせんとせしも、聊かさし障る事ありて之を中止し、翌年五月第五定期宗會の東京に開かれし際、稿を携へて予の自坊に來り時機を逸したればとて「興國の宗教」と改題し、それが出版方を予に依頼せられ、予爲めに多少の奔走する所ありし事憶と憶はず、且つ他に聊か思ふ所あり、狀を具して著者の許に返戻したり、越へて四十年、著者不治の病痾に呻吟する身となり、今茲十月十一日溘逝として易質せられぬ、予その葬儀に列して此書の體底に沈めるを回想し、默過するに忍びず、遺族の許諾を得て之を携へ歸りたり。

歸りて之を上梓せんとするに當り、予の獨力經營に難んずるものあり、豫約出版なさんか、將た他の方法を取らんか、頗る其手段に感ふ所ありしも、管長日生上人及二三先輩の指揮に任せて、著者生前の道交ある風俗諸士の同情に訴へ、諸士の義助を得て之を出版する事はなしぬ。

此書片々たる小冊子、案より著者遺著の萬一を披瀝せしもの、か、至竟著者の意は、著述界の初陣として此書を公にし、因て以て其手腕を驗し、病痾の後半生を文筆として數界に貢獻する所あらんとせしもの、然も不幸空しく志を齎らして永への眠りに入る、遺憾を限り、予著者と道交淺からず、如上の消息を知悉するが爲、進んで此書を刊行し、著者の冥福に冀すると同時に、一面寂寥たる宗門の著述界に喚醒を撃たんと欲するのみ、若しそれ此書の出版によりて何等かの反響を得、因て以て先輩諸師及道友諸君の、猛烈として著述界に出馬するものあらば、我願則ち足る、著者亦瞑せん。

明治戊申臘月

山根 日東 謹誌

明治四十二年一月十七日印刷  
明治四十二年一月十九日發行

興國の宗教奥付  
正價金五十錢

著 者 故 清 瀬 貞 雄

大阪市東區西高津區成寺住職

發 行 者 山 根 日 東

東京市淺草區新谷町十四番地

印 刷 者 北 澤 久 太 郎

東京市京橋區大船町十四番地

發 行 所 東京府荏原郡品川町 統 一 團

南品川宿四一二番地

(振替貯金東京二二一九番)

發 賣 所 東京市京橋區 須 原 屋

南傳馬町三丁目

(振替貯金東京四九六〇番)

### 發賣書目

文學博士 三宅雄次郎君序 (既製發賣)  
大僧正 本多 日生師著

# 法華經講義

和裝帙入全八冊 正價金四圓 郵(金一十錢)  
洋裝背皮全二冊 稅(臺灣韓五十錢)  
古今東西の法華經觀を網羅し特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したるは本書なり  
大僧正 小 跡 日 生 合著  
大僧正 本 多 日 生 合著

## 顯本法華宗綱要

顯本法華宗義の全班を知らんと欲するものは是非本書を一讀せらるべし  
顯本法華宗務應發行

## 顯本法華宗宗制

附 寺院住職一覽表  
全宗現行の諸則寺院教師等詳細に記載しあるを以て其大勢を知らんと欲せば一本を購はるべし

發行所 東京府在原郡品川町南品川宿四一二番地 統一團

### 再版出來

文學博士 姉崎正治君序 (既製發賣)  
大僧正 本多 日生師編

# 聖語錄

洋裝九百頁 特製金壹圓二十錢 郵稅金八錢  
並製金八拾五錢  
法華は佛教の綜合歸一を宣し、聖祖は各宗の積極統一を唱へたるもの、その教義の深遠に且多方面にして、眞意を正明に會得し難きは、實に宗の内外に於ける古今の噴聲なり、本書は法華の三部及祖書全集に就て之を整理たる組織の下に類聚編成せられたるもの研究の土も布教者も信徒も必ず一讀すべき日宗の聖典なり、目を改めたるを以て其厚さ初版の約三分二となりたれば携帶に至極便利なり

發行所 東京府南傳馬町三丁目五番地 振替貯金 四九六〇 須原屋  
東京府在原郡品川町南品川宿四一二番地 振替貯金 一二一九 統一團

### 再版出來

